
竜が辿り着いた幻想郷

ベヘモス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜が辿り着いた幻想郷

【Nコード】

N2724W

【作者名】

ベヘモス

【あらすじ】

身体から解放たれた力は、虚空を巡る回る内に自我を持ち幻想郷へと辿り着く。

人と妖怪が暮らす幻想の世界で、竜は何を想うのだろうか……。

第一話 竜の目覚め

??? Side

ある日の朝。私は何時もの様に神社の境内を掃除しようとしたら、境内に見慣れない服を着た青い髪の少年が倒れているのを発見した。彼の服装は里の人間の物とは違い、袖の無い白い服に鉄紺てつこん色に近いズボンズボンを穿いている。

里の人間はこんな服は着ないだろうし、彼から感じられる気配も人の物じゃない。だからと言って妖怪が放つものとも違う。

どちらかと言うと…… 龍に近い雰囲気すら感じられる。

でも、此処で龍と言えば最高神の龍神だけの筈。

龍神が下界に下りて来るまずありえない事だし、今私の目の前に居るのが龍神だとは思えない。

だったら彼は一体なんなのか。

幾ら考えても答えは出ないけど、もし龍神の血族だったらこのままにしておく訳にもいかない。

「……はあ。メンドクサイな」

私は溜息を吐きながらも、倒れている彼を神社へと運んだ。

??? Side out

……俺は今夢を見ている。

夢の内容は、俺が？神？を捨てた時の事。

もう一人の自分と戦い、その末に俺が選んだ答え。…あの世界には、もう？うつろわざるもの？は必要なかったから。

だから、あの選択に後悔はしていない。……でも、如何して俺はこんな夢を視ているんだろ。俺は他の竜達と一緒にあの世界から消えた筈なのに……。

「……う、うん……」

眠っていた俺は、差し込んでくる光の眩しさで目を覚ました。

目を覚ました俺の眼に最初に入ってきたのは、初めて見る内装の部屋だった。

今まで世界を旅して来たけど、こんな内装の部屋は初めてだ。

木で出来た家と言うのは確かにあったし、床で寝るのも初めてじゃないけど……建物の構造そのものが違う。

なんでこんな所で寝てるのか覚えてないけど、今は此处が何処なのか考えるのが先決か。

「あ、漸く起きた」

「……？」

半身を起した所でドア……と思うものが開き、腋出しの変わった形の紅白の衣装を着た黒髪の少女がこの部屋に入ってきた。

あの子は一体誰だろう。この家の子かな？ と言うか、腋を出して寒くないのかな？

……服の袖が無くて、腋を出してるのは俺も一緒か。

「アンタ、人の家で何日眠ってるのよ」

「……一体何日寝てたんだ？」

「三日よ三日。全く、死んだ様に眠ってるから既に死んでるのかと思っただじゃない」

「あゝ、随分眠ってたんだな」

「……暢気ねアンタ」

黒髪の少女は、俺の発言に呆れているが……そんなに呆れる様な事か？

もう一人の自分だったアイツは、数百年間寝てた記憶があるし、三日くらいなら呆れる事もないと思う。

「まあ良いわ。……それでアンタは一体何者なの？」

「……？ それはと言う意味だ？」

「言葉の通りの意味よ。見た目は人間だけど、気配は人のそれとは明らかに違う。でも、妖怪なんかの気配とも違うし……」

「……………」

彼女が言う妖怪ってのが何か分からないけど、人じゃないって事は……やっぱり俺はリュウが捨てた力なんだな。

だとすると、俺は自分の事を彼女になんて説明すれば良いんだろう。

かつて神と呼ばれていた者……は、少し違うかな。

俺の意識はどちらかと言うと、フォーウルよりもリュウに近いみたいだ。

分かれていた力が一つに戻った事で、二人の力を使えると思うけど……今は関係ないな。

こうなると、本当になんて説明すれば良いのか分からなくなるな。今の俺は竜の力が、肉体と意志を持って一人歩きしてる様なもんだし。

……ややこしく考えるより、一から説明した方が良いか。

「……少し長い話になるけど、良いかな？」

「出来るだけ手短にお願いするわ」

「え、ええ……」

あの旅を記憶を短く話すのって、結構大変な気がするんだけど……。まあ、俺の事を説明する上で話さなくても良い事も多いし、なんとか頑張ってみるか。

「……一番最初の始まりは、とある世界に一体の竜が召喚された事から」

こうして俺は話し始めた。二つの身体に分かれてしまった一頭の竜かみが世界を巡る物語を……。

二つに分かれた竜は世界を巡り、様々な人に出会い、様々な出来事に関わる。

……そして世界を巡る内に二人は違う答えに辿り着き、全ての始まりの地で二人は戦った。

「——戦いの末、分かれた竜は元に戻り……そして神である事を止めた」

「……それじゃ、アンタは一体なんなの？」

「俺は、その神と呼ばれた竜の力そのものかな。だから君の言う通り、俺は人でもなければ、妖怪と呼ばれる存在でもないんだ」

「……それでアンタはこれから如何する積もり」

「如何もしないかな。この力を使って世界を滅ぼそうとは思わない。だからと言って、他に行く宛もないし」

「そう。……だったら暫く家に居なさいよ」

「いいのか？」

「良いも何も、アンタみたいなのを野放しにしてる方が危ないですよ」

「……それもそうか」

さつき自分でも言ったが、今の俺は竜の力そのもの。

今は人の姿をして落ち着いているけど、何時暴走するか分からない。そんな危険な存在を放置するよりも、傍に置いて監視してた方が良いのかもしれないな。

「でも、君の力で俺を止められるの？」

「舐めないで頂戴。こう見えても私は幻想郷のバランスーで、異変や妖怪退治は私の仕事なのよ」

「……つまり？」

「つまり、アンタみたいなのを退治する専門家って事よ」

「そっか。それなら安心だな」

「そう言う事。……それじゃ、ちょっと食事を持って来るから少し待ってなさいよリュウ」

「……リュウ？」

「アンタの名前よ。…さっきの話を聞く限りだと名前も無さそうだし、竜の力そのものなんでしょ？ だからそう呼ばせて貰うわ」

「……………」

彼女に？リュウ？と呼ばれた時、俺は戸惑いと懐かしさを感じた。
この名前はもう二度と呼ばれる事はないと思っていたし、俺はアイツじゃない。

……でも、そう呼ばれるのも嫌じゃなかった。

「それじゃ、持ってくるから待ってなさいよ」

「その前に聞きたい事があるんだけど」

「ん？ なによ」

「君の名前はなんて言うの？」

「…霊夢よ。博麗霊夢」

「そっか。…それじゃ、今日から宜しくな霊夢」

「……先に言っておくけど、アンタにも色々と働いて貰うからその積もりでいなさいよ」

「わ、分かったよ……」

俺がそう返事すると、彼女……もとい霊夢は部屋を出て行った。

霊夢は色々と働いて貰うって言ってたけど、一体俺に何をさせる積もりなんだろ……。

第一話 竜の目覚め（後書き）

初めまして、ベヘモスと言う者です。

この度、東方とBOFのクロス作品を唐突に書きたくなったので書く事にしました。

時系列的に言いますと、主人公はBOF?のED後で、幻想郷の時系列は紅霧異変前になります。

今後リユウは、博麗神社に居候して平凡な日常を満喫しつつ、様々な異変に巻き込まれていきます。

一応、ラスボス的なキャラは考えてあるので、その異変まではリユウの異変解決物語になると思います。

BOFを知らない方も居ると思いますが……別に原作を知らなくても問題ないかと。

とりあえず東方風に言くと、主人公は？様々な竜に変身する程度の能力？を持っていると考えて下さい。

様々と言っても、変身出来るのは八体だけですけどね。

それでは次回の更新でお会いしましょう。

第二話 竜の居候

霊夢の家……じゃなくて、博麗神社に居候が決まった翌日。

俺は朝食を食べた後、霊夢から仕事を頼まれた……と言つか、押し付けられた。

その仕事と言うのが、この神社の境内の掃除。

普段は霊夢が一人で掃除しているそうだが、今後は俺に掃除を任せる様だ。

「しかし、この時間にする事が掃除だけとは……」

渡された箒を片手に呟くものの、巫女の仕事を知らないんだし、雑用を頼まれるのは当然と考え割り切る事にした。

とは言え、俺が掃除をしてるなんてフオウルが知ったらどんな反応をするのやら。

元は同じ存在だとして、永い時間分かれていたから俺とは性格が全然違うんだよな。

「……アイツならきつと、『何故その様な事をしなければ為らない』とか言つて、霊夢と喧嘩しそうだな」

その事を考えると、何故か苦笑いが零れた。

自分であるのに何処か他人の様な感じだからか、それとも考えるだけ無駄だからか。

どちらの答えも正しい様な気がするが、今は置いておこう。

コレ以上物思いに耽っていると、霊夢に怒られそうだし。

「……よし、それじゃ頑張ってみるか」

俺は箒を握り締め、慣れない手付きで境内の掃除を始めた。

……

……

…

掃除を始めて大体1・2時間が経っただろうか。……掃除は未だに終わっていない。

……いや、うん。正直言って、掃除と言うものを舐めてました。この作業って、こんなにもメンドクサイものだったんだな。

旅をしていたから、料理を作ったり使った食器を洗ったりはしてたけど、こんな風に掃除をした記憶はないな。

フォウルの時なんて戦う事しかしてなかったから、料理を作るなんて事はなかったし。

それにアイツは、西の大陸を統一した帝国の初代皇帝だから、掃除をするなんて発想自体が無い様な気がする。

こうやって考えてみると、本当に俺とフォウルって違うな。

一つになる前は分からなかったけど、今ならアイツとの違いや考えが良く分かる。

……でも、やっぱり俺はリュウよりの人格だ。考えが分かっててもアイツの様に人を滅ぼそうとは思えない。

俺はリュウの様に力を捨てる事は出来ない。だったら、あの古竜達のようにこの地を見守るのも良いのかも知れないな。

「もし、少しお時間宜しいかしら？」

「…？」

掃除をしながら色々と考えていると、紫色のドレスを着て日傘を差した金髪の女性に話し掛けられた。

幾ら俺が物思いに耽っていたとは言え、話し掛けられるまで彼女の存在に気が付かないとは思わなかったな。

「えっと…俺に何か用ですか？」

「いえ、貴方ではなく霊夢に用があるのだけど…何処に居るか知らないかしら？」

「霊夢なら母屋の方に居ると思いますよ」

「そう。有り難うね、異世界の竜さん」

「えっ？」

女性がそう言うと、そのまま母屋の方へと歩いていった。

俺は彼女に声を掛けようと思ったけど、なんだか言葉が出て来なかった。

如何して言葉が出て来なかったのか分からないけど、あまり彼女に関わりたくない…そう思ったからだ。

霊夢 Side

「……………今日も平和ねえ」

そんな事を呟きつつ、縁側で用意したお茶を一杯飲む。

リユウが境内の掃除をしてくれるお陰で、私は普段よりものんびりしてられる。

最初にアイツを拾った時は如何しようかと思ったけど、こうして見ると良い拾いモノだったのかも。

……………まあ、掃除の腕前はイマイチみたいだけど。

昨日の話を聞く限りは、まともな掃除の経験が無いみたいだし、多少時間が掛かるのは仕方が無いか。

それに、アイツに頼める仕事って言う雑用しかないのよね。流石に巫女の仕事は任せるわけにもいかないし。

「ハア〜イ。お久し振り霊夢」

「帰れ」

「……………いきなりそれは酷いじゃない」

縁側でお茶をしていたら、いきなり八雲 紫がやって来た。

全く、このスキマ妖怪は何をしに来たのやら。……………本当に下らない用事だったら、全力で追い返そう。

「今日は何をしに来たのよ。下らない用事だったら怒るわよ」

「全然下らないわよ。……………今日来たのは、あの竜に付いてよ」

「リュウが如何したのよ」

「惚けるんじゃないの。…貴女も気が付いてるでしょ。あの莫大な力を」

「……………」

成る程、紫が何を言いに來たのか分かったわ。

要するに、リュウの力が幻想郷の害になるか如何かって話しね。

まあ、紫の心配も分からなくも無いけれど、私は其処まで気にしなくても良い様な気がするな。

「単純な力なら鬼を陵駕する程よ。幾ら修行をサボりがちの貴女でも理解出来るでしょ？」

「当たり前よ。アイツの力が分からない程鈍っちゃいないわ」

「だったら、何故あの竜を住まわせるの」

「別に大した理由は無いわよ。ただ、アイツを放り出すのが危険だと思っただけよ」

「……本当にそれだけ？」

「如何言う意味よ」

「別に大した理由はないわよ」

「ふん……。それで？ アンタから見てリュウは如何なの？」

「…正直、訳が分からないわ」

「でしょうね」

アイツが持つている力を見たら弱い妖怪は逃げ出すだろうし、紫の様に強い妖怪は警戒を始める筈。

でも、実際のアイツを見るとごく普通の少年と言った感じにしか映らない。

確かに力は神と崇められるだけのモノはあるんだけど、威厳と言うものが一切ない。

正直な話し、あの性格なら人里で暮らしてもバレないと思うのよね。

「様子を見るために近付いたら、境内を掃除してる上に、普通に應對されて拍子抜けだったわ」

「アレだけの力があるのに、境内の掃除をしてたら妖怪賢者のアンタでも拍子抜けするか」

「…それと同時に、霊夢の神経の太さにも驚いたわ」

「失礼ね。私の何処が図太いのよ」

「其処までは言ってないわよ」

「言ってるようなもんじゃない」

否定する紫に私は思わず食い掛かった。
神経が図太いと言われて嬉しくないし、コイツにだけは図太いなんて言われたくない。

「まあ、それは置いておくとして――」

「置いてかないでよ」

「―― 今後は彼を如何する積もり？」

「…… 別に如何もしないわ。このまま神社に居候させるだけよ」

「もし暴れだしたら如何するの？」

「その時は…… 私がアイツを討ち取る。元々そう言う約束だしね」

「そう。なら、もつと真面目に修行しなさい」

紫はそう言つと、地面に作ったスキマに潜り忽然と姿を消した。
全く、最後の最後で小言を言つて行つたわね。如何言う形であれ、
巫女の仕事をこなしてるんだし問題ないじゃない。

紫が消えた縁側で一人、温くなつたお茶を啜りそんな事を思った。

……

……

…

紫が帰ってから少し経つて、リュウが私の元にやつて来た。

如何やら境内の掃除が漸く終わったみたい。……でも、二時間半は
掛かり過ぎね。

「全く。もつと手早く出来なかったの」

「初めてだから勝手が分からなくて」

「言い訳しない」

「はい、すみません」

私が叱るとリュウは少し落ち込むが、その姿を見ると本当に竜なのか疑問に為ってくる。

いや、コイツから感じられる力は明らかに人の物じゃない……んだけど、なんか釈然としない。

別に媚び諂ってる訳じゃないんだけど、如何しても納得出来ないのよね。

これじゃ、何処にでも居る普通の少年と変わらないじゃないの。

「……………」

「ん？ 俺の顔に何か付いてるのか？」

「ええ。目と鼻と口が付いてるわ」

「いや、それは付いていて当然だろ」

適当にからかって見ても、返って来る反応は普通なもの。

これで変な返しをされても困るけど、これじゃ益々威厳が無くなるわね。

……威厳のあるリュウか。イマイチ想像出来ないわね。

「ねえ、リュウ。ちょっと威厳のある一言を言ってみてよ」

「へっ？　なんで？」

「良いから」

「……………余に従え愚民共」

「うわ、似合わない上に無性に腹が立つ」

「言わせたの霊夢だろ?!」

「うつさい」

こうして話していると、こいつに威厳なんてものを求めるのは無理ね。全然似合わないし。

そう考えると、今のリュウが一番合ってるのかも知れないわね。

日本の神様だって、時には人間以上に人間くさく為るんだし。

「…それじゃ、食料買いに行くわよ」

「今から？」

「そうよ。元々一人分しか蓄えてないのに、アンタが居候するんじや数日で蓄えが無くなるわ」

「成る程」

「分かったんなら、荷物持ち宜しくね」

「りょーかい」

こうして私とリュウは、神社を下りて人里へと向かった。
本当は空を飛んで行けば速いんだけど……まあ、道案内がてらノン
ビリ歩いて行きますか。

第三話 動かない古道具屋（前書き）

今回は霊夢視点です

第三話 動かない古道具屋

私はリュウを連れて人里にやって来た。

リュウは里が珍しいのか、入り口に着いた時から辺りをキョロキョロと見渡している。

今まで旅をしていたのだし、この程度の事で驚かないで欲しいわ。

「ちょっと、いい加減落ち着きなさいよ」

「あ、悪い。余りにも珍しかったからつい」

「ついつて、アンタ今まで旅してきたんじゃないの？」

「してたけど、此処みたいな家や人の服装は見た事無いから」

「ふん」

如何やら、コイツが居た世界にはこの里に近い形の集落は無かったみたい。

前に聞いた話は、飽く迄もリュウの人となりを聞くだけのものだから、どんな場所を旅してたのかは聞いてなかったな。

まあ、今すぐ聞き出さなくちゃいけない訳でもないし、気が向いたらで良いか。

「ほら、さっさと買い物を買わせるわよ」

「へい」

一応返事はするものの、リュウは相変わらず辺りを見渡している。

幻想郷に住んでいる私には何が珍しいのか分からないけど、コイツに取っては違うみたいね。

でも、物凄く恥かしいから今すぐ止めて欲しい。……口で言っても分からないなら、実力行使で分からせれば良いか。

「…なあ霊夢。今、殺気みたいなのを感じたんだが」

「気のせいでしょ」

「そ、そうか？」

「そんな事より早く行くわよ」

「あ、ああ」

今一つ釈然としてないようだけど、リユウは漸く落ち着いて私の後を付いて来た。

それにしても、リユウの奴意外と勘が良いのね。

まあ、人里で暴れる必要が無くなったから良いんだけどね。

リユウに里を案内しつつ必要な物を買っていると、突然リユウがとある道具屋の前で立ち止まった。

特に急ぎの用もないし、コイツが何に興味を示したのか気になり、私も隣に立ち視線の先を追ってみる。

リユウの視線の先を追っていったら有ったのは、籠に入れられた何の変哲もない竹竿だった。

「……その竿に何かあるの？」

「いや、只の竹竿だけど」

「それなら、何で熱心に見てるのよ」

「あの竹竿が欲しいなあゝって」

「却下」

「即答された?!」

全く、行き成り立ち止まるから何事かと思えば……釣竿が欲しいなんてね。

意外な趣味と言えそうだけど、今回は食料を買いに来ただけで竿を買いに来たんじゃないのよ。……それに値段も高いし。

只の釣竿の筈なのに、4500円って一体如何言う事よ。高が竹竿じゃない。

仮に使っている竹が良いとしても、こんな竿なら500円かそこで十分よ。

「……霊夢、如何しても駄目か?」

「駄目よ。……ほら、何時までも立ち止まってないで行くわよ」

「うう……無念だ……」

無念と言いつつもリュウは、私の後について来る。

お財布を握っているが私でコイツは居候だからか、はっきり却下してしまえば強く出たりしないみたい。

リュウに物欲が強いのか知らないけど、今後の為にもお財布は確り握っておかないとね。……それにしても――

「……釣り、したかったな」

——物凄く落ち込んでるわね。

別にあの釣竿が欲しかった訳じゃないみたいだけど、どれだけ釣りが好きなのやら。

……ずっとこんな調子だと、なんか悪い事したみたいで申し訳なくなってるわね。

安かったら買ってあげても良かったけど、あの値段は如何考えてもぼったくりでしょ。……リュウには悪いけど、今回は我慢して貰うわ。その後私は、落ち込んでいるリュウを引き連れて手早く買い物を済ませた。

……

……

…

リュウを人里に案内してから一週間が経った。

落ち込んでいたリュウだったけど、翌日にはケロツとした様子で雑用をこなしていた。

一日で機嫌が治ってくれたのは良かったんだけど、本人に聞いたなら笑いながら『居候だし、霊夢に無理は言えないって』と言っていた。幾ら竜とは言え、ちゃんと遠慮と言うものをしてるみたいで助かるわ。

「それじゃ、ちょっと出掛けて来るから留守番よろしく」

「いつてらっしゃい」

私はリュウを神社に一人残し、魔法の森にある香霖堂へと向かった。香霖堂と言うのは、知り合いの半妖―森近 霖之助―が経営している珍品道具屋の事。

珍品道具屋と言うよりも、古道具屋と言った方が正しい気もするけど。

あの店に取り扱っている物の大半が拾って来た物で、霖之助さんは変わり者だし。

……まあ、道具作りの腕は確かだから別に良いか。それに幻想入りした道具を取り扱う唯一の店で、ツケが利くから大助かりだしね。

「……やっぱり、飛んでいくと早く着けるわね」

神社を出て三十分もしない内に香霖堂に到着した。

店の中は色んな物が置いてあってゴチャゴチャしてるけど、もう少し整理する気は無いのかしら。

……どの道、魔理沙が持っぬすんでて行くからキチンと整理する必要も無いのか。

「いらっしゃい霊夢。約一週間振りだね」

店の奥から、眼鏡を掛けた白髪青年が顔を出した。

彼がこの店の店主の霖之助さんだ。

若い様に見えるけど、本人曰く私の何倍も生きているんだとか。

「久し振り、霖之助さん。今日はお札と針を注文しに来たわ」

「……またツケかい？」

「当然」

「いい加減、溜まったツケを払って欲しいんだけど」

「気が向いたら払うわ」

「やれやれ。…用意して来るから、少し待って居てくれ」

それだけ言い残すと霖之助さんは店の奥に引っ込んでいった。

この間は特にする事も無く、お茶を飲もうにも準備するのが手間だから置いてある物を見てみよう。

何か使えそうな物が有ったら貰って行く事にしよう。……当然ツケで。

使えそうな物と言っても、この店の置いてある殆どの物が外の世界の道具だから、イマイチ何に使うのか分からないのよね。

霖之助さんが居れば、如何言う用途の道具が聞けるけど……今は無理か。

それにしても、前に来た時よりもゴチャゴチャしている様な気がするんだけど……私の気のせい？

元々色々な道具を置いてあるからそう感じてたんだけど、久々に来たから余計にそう感じるわね。

大小さまざまな物を無造作に置いてあるから、何処に何があるのか良く分からない……って、また変な物が紛れてるわね。

「お待たせ、霊夢。ご注文の品が出来上がったよ」

「ねえ、霖之助さん。この紅く光る石は何？」

「ああ、それはフェアリドロップと言う金属の一種だよ」

「金属って……これが？」

「ああ」

霖之助さんはそう説明してくれるけど、名前と見た目からしても金属には見えないわね。

どちらかと言うと、宝石の原石と言われた方が信じれそう。

「……もしかして、それが欲しいのかい？」

「別に良いわ。買った所で漬物石にしか使い道無さそうだし」

「確かにそうかもしれないね」

「その代わり、これを貰っていくわ」

「釣竿？」

私が指指したのは、店の中を物色中に見つけた釣竿。

まあ、私の知っているのは少し違って、持ち手の近くに取っ手が付いた丸い器具がある奴だけだ。

見た感じからして釣竿だと思ったけど、どうやら間違いじゃなかったみたいね。

「君が釣りだなんて、珍しいね」

「私じゃなくて、今ウチに居候してる奴が欲しそうにしてたのよ」

「博麗神社に居候って……もしかして、その人は外来人かい？」

「うゝん……そんなところかな」

「……？ 随分と曖昧な返答だね」

「色々あるのよ」

「そうかい。…それじゃ、その釣竿を包むから渡してくれ」

「はいはい」

私は釣竿と、ついでに針と糸を霖之助さんに渡した。

この竿の値段は、里で見た竹の奴の半分以上の値段で買うことが出来た。

……やっぱりあの竿はぼったくりよね。如何考えてもあの値段は可笑しい。

支払いは何時も通りツケにしてもらった私は、商品を受け取り店を後にした。

品物を手に神社への帰り道を飛んでいると、正面から白黒の魔法使いが箒に跨ってこっちに来るのが見える。

あんな格好をしてるのは魔理沙一人だけど……何をそんなに慌てているのやら。

「ちょっと魔理沙。そんなに慌てて如何したのよ」

「よ、よう、霊夢か。わりいけど私は忙しいんだ。だから先を急が

せて貰うぜ！」

「あ、ちょっと！」

何を慌てているのか知らないけど、魔理沙は止まる事無く大慌てで行ってしまった。

アイツがあんなに慌てているのは珍しいけど、神社の方からやって来たのが気に為るわね。

神社にリュウが居るし、変な事には為ってないと思うけど……なんかやな予感がするわ。

リュウは恐らく無事だろうけど、神社がどうなってるのか不安ね。今は一刻も早く神社に帰る事にしよう。

………

………

…

急ぎ帰った私の目に飛び込んで来たのは、何かに吹き飛ばされた様に荒れ果てた境内と、それを直そうと必至に作業しているリュウの姿だった。

幸いにも神社本体は無事だったけど、境内の方は滅茶苦茶になっている。

なんでこうなったのか知らないけど、恐らく当事者である筈のリュウに聞けば分かるわね。

「…リュウ、ちょっと良い」

「お、お帰り霊夢。……もしかしなくても、怒ってるよな」

「とりあえず、何が遭ったのか話なさい」

「魔理沙って言う奴と戦って、マスタースパークなる魔法を放たれました」

「……そう」

あの時は、魔理沙が慌てている理由が分からなかったけど、これではつきりしたわ。

アイツ、遊びに来たと思ったら何をぶっ放してるのよ！

如何言う経緯があるのか知らないけど、少しは限度を考えなさいよ！！

「魔理沙め、今度会ったら只じゃおかないわ。それとリュウ！」

「はい！　なんでしょうか！？」

「アンタは荒れた境内の片付け。それが終わるまで晩御飯は抜きよ！！」

「そんな殺生な？！」

「……なんか文句ある？」

「いえ、ありません……」

全く、留守番を任せたらコレか。
リュウが自分から喧嘩を売ったのかは兎も角、何を如何したらこうなるのよ。

……はあ。これじゃ、買って来た釣竿はお預けね。

第四話 普通の魔法使い（前書き）

これは霊夢が香霖堂で買い物してる時の話。

第四話 普通の魔法使い

霊夢が仕事道具を買いに行っている頃、俺は暇を持て余していた。今日の雑用は大体終わっているし、食料の買出しはまだ行かなくても大丈夫。

暇潰しに剣の素振りをしようにも、手元に剣がない。釣りに行こうにも釣竿がない。

……何か他の趣味でも見つけないと、暇で死にそうになるな。

「おーい、霊夢。居るか」

特にする事も無く縁側で呆けていると、空から黒いトンがり帽子に黒系の服に白いエプロンを付けた、ウェーブのかかった金髪ロングの少女がやって来た。

一週間ほどこの神社で暮らしているが、人が尋ねて来たのはこれで二度目だな。

……いや、あの女性は人じゃないから違うか。

「霊夢、居ないのか……って、お前誰？」

「俺の名前はリュウ。そう言うアンタは泥棒か？」

「いや、わたしは『普通の魔法使い』の霧雨 魔理沙だ」

普通の魔法使いって……。魔法使いに普通とか関係あるのか？それに俺の記憶の中にある魔法使いは……少なくとも人じゃなかったな。

アレを人と認めたら、俺の中にある何かが崩れる気がするし。

「それで霧雨さん——」

「魔理沙で良いぜ。霧雨さんなんて言われたら、背中がむず痒く為っちゃう」

「——それじゃ魔理沙。一体なんの用で此处に来たんだ？ 参拝ならちゃんと正面から来てくれないと」

「違う違う。参拝じゃなくて、霊夢に用事があつて来たんだ」

「霊夢は買出しに行ってるから居ないぞ」

「如何やらそうみたいだな」

俺は魔理沙に霊夢の外出を告げたが、彼女は帰らず縁側に座り込んだ。

突然の訪問者だけど、特別追いつ返す理由も無いし此处はほつというも良いか。

そう考えた俺は、魔理沙を持て成す事も追いつ返す事もせず、ただボ——っとする事にした。

「リュウ……って言ったか。お前は霊夢ん家で何してんだ？」

「俺は博麗神社に居候こゝろしていてね。だから留守番してるんだ」

「……居候こゝろってマジでか？」

「そうだけど、驚く様な事か？」

「いや、普通驚くだろ」

如何やら魔理沙の中では、霊夢が居候を許可するイメージが無いらしく、かなり驚いた様子だ。

魔理沙と霊夢がどの位の付き合いなのか知らないけど、そんなに驚く事か？

俺は此处で暮らす様になってまだ一週間しか経ってないし、霊夢について魔理沙ほど知っている訳じゃないからイマイチ分からないな。

「お前、一体どんな手を使ったんだ？」

「どんなって……別に何もしてないけど」

「何もしてない訳無いだろ。あのメンドクサガリな霊夢の所に居候なんて……いや、メンドクサガリ屋だからこそ許可を出したのか？」

「……魔理沙の中にある霊夢のイメージってどんなんだよ」

「メンドクサガリ屋、怠け者、働かない博麗の巫女」

「酷い……」

怠け者って、確かに霊夢は俺に仕事を任せて一人お茶を飲んでる事が多いけど、ちゃんと仕事はしているぞ。

大体、俺にこの神社の仕事を全部任せられる訳ないんだし、『働かない博麗の巫女』は言い過ぎだ。

……まあ、メンドクサガリ屋なのは否定しないけどね。

「ところで、魔理沙はなにしに来たんだ？」

「わたしか？ わたしは新作のスペカが出来たから霊夢で試し撃ちをしようと思っただけ」

「……スペカってなに？」

「お前、スペカを知らないのか？」

「うん。初めて聞いた」

「そうか。……ならば、このわたしが特別にスペカに付いて教えてやるぜ！」

「はい？」

魔理沙は立ち上がってそう言って来たけど、只単にさっき言っていた新作とやらの試し撃ちがしたいだけなんじゃないのか？

……

……

…

スペカに付いて教えると言われたが、俺は自身は特に興味はなかった。

だと言うのに魔理沙は強引に俺を境内に連れ出し、スペカに付いて説明し始めた。

スペカについて色々と説明してくれたが、極端に言って仕舞えばこれは決闘紛いの遊びらしい。

魔理沙も『この世でもっとも無駄なゲーム』だと言ってるし。

……それを聞くと、尚更興味が無くなって来るな。

「それでスペルカードにも色々な種類があって……って、ちゃんと話を聞いてるか？」

「まあ一応。とりあえず、相手に自分のスペカが全て攻略される前に撃ち落とせば勝ちって事だろ」

「撃ち落とすって言うか、相手の体力が尽きればこっちの勝ちだ」

「似た様なモノじゃないのか？」

「違うぜ。精神的な勝負と言う面もあるから、自分のガッツが切れても負けになるんだ」

「へえ」

ガッツが切れたら負けになるってのはなんとなく理解出来るけど、精神的な勝負って如何言う事だ？

まさか、相手のトラウマを思い出させる……なんて事はないか。そんな事をされたら、俺の力が暴走しかねないから止めて欲しいな。

「まあ、口であれこれ言っても分からないだろうし、手っ取り早く見せるか」

「そうしてくれ」

「今回は説明だから、私は三枚のスペカを使うぜ」

「なら俺は、その三枚全てを回避できれば良いのか」

「回避以外の手段で攻略出来るなら、それでも構わないがな」

「了解」

「それじゃ一枚目。…魔符『スターダストレヴァリエ』!」

魔理沙が箒に跨って空へ飛び、カードを手にそう宣言すると、彼女の周囲に大量の星屑が出現し一斉に降り注ぎ始めた。

一個の星屑の大きさは大した事無いが、降り注ぐ星の数が多い。

俺は魔理沙との距離を離して回避を試みるが、この姿では無傷の回避は無理みたいだ。

現に今も幾つかの星屑が俺の頬や服を掠めている。

「ほらほら。そんな避け方じゃいずれ当たっちゃうぜ」

「それくらい、分かってる…って!」

一応あの星屑の軌道を把握してるんだけど、身体がその反応に追いついてくれない。

俺の敗北条件が、体力切れかガッツ切れだけだから多少当たっても大丈夫だけど、どうせなら一回も被弾しないで勝ちたい。

さっきの説明だと、掠めたりするのは被弾にはならないみたいだし、かすり傷は気にせずに避け続けるか。

多少のかすり傷は出来るものの、俺は必至になって魔理沙の星屑を避け続けた。

俺が避け続けていると星屑の勢いは段々と弱まっていき、少しすると星屑は完全に降り止んだ。

「……むう。意外と粘るな」

「そろどうも」

「なら、次のスペカだ！」

もう次のスペカを使うのか。何が来るのか分からないが、用心はしておかないとな。

魔理沙はさっき、スペカにも色々な種類があるって言ってたけど、今度のは如何言うタイプなんだ？

あの星屑みたいなのは、回避が面倒だから出来れば遠慮したいな。

「光符『アースライトレイ』！」

二枚目のカードを取り出し、そう宣言した魔理沙は何処からとも無く大量の小瓶を取り出し、上空からばら撒いて来た。

一体何がしたいのか分からず、その場で様子を窺っていると……地面に落ちたビンが割れ、其処から眩い光が一斉に立ち上って来た。

「な、なんだこれ?!」

俺は突然の出来事に驚いたものの、光は上に立ち上るだけで、星屑よりは軌道がはつきりしている。

はつきりしてはいるが……魔理沙が投げる小瓶の数が多く、ちょっと油断していると直ぐ隣りで光が出現するから心臓に悪い。……それでもまだ、さっきの星屑よりは避けやすいかな？

「フハハハッ！ ビンはまだまだあるんだぞ！」

「手加減なしかよ!!」

「勝負は常に非情なものだぜ!!」

「ぬわゝ!!」

どうやら魔理沙は手加減を知らない……と言つか、する気が無いらしい。

今も両手で抱えられるだけの小瓶を一齐に地面に落としてる。

そう言えば、地面に落ちた小瓶ってどうなるんだろう？ もし破片が残ってたら……後で掃除確定だな。

「隙あり!」

「あぶなッ?!」

俺の隙を付いて投げられた小瓶は、俺の足元近くで炸裂した。

直ぐに後ろに跳ぶことで、掠りながらもなんとか回避出来たけど……

…あと少しでも遅かったら被弾してたな。

全く、戦闘中になに变な事を考えているのやら。そう言つのは後で考えるべきだろ。

「惜しい! あと少しだったのに」

「いや、本当にな。アレは危なかった」

「さっきので『アースライトレイ』も切れたし、次で最後だな」

「やつとか……。この遊びって結構集中力使うんだな」

「わたしのはまだ回避し易い方だと思うぞ」

「……アレでか？」

「アレでだ」

スペカに初めて触れたからイマイチ信じられないんだが、コレ以上に回避し辛い弾幕ってなんだよ。

今でも精一杯なのに、コレ以上のは無傷で攻略出来る気がしないな。

「さて、次のカードで最後の訳だが……これはさっきの二枚とは一味違うぜ」

「あの二つも大分差があると思うけどな」

「それとも違うって事だ。……それにコイツは回避出来ないと思うしな」

「……？ 如何言う事だ？」

「ソイツは喰らってからの楽しみみてな。…それじゃ行くぜ!!」

そう言うのと魔理沙は今まで乗っていた筈から降り、帽子の中から八角形の道具を取り出した。

そして、道具の反対の手からスペカを持ち――、

「恋符『マスタースパーク』!!」

――さっきの二枚と同様に宣言した。

宣言した魔理沙は、八角形の道具を俺に向けて超極太のレーザーを放ってきた。

放たれたレーザーの速度は、今の俺の速度の遙か上に行く。

今から回避出来るはずも無く、このままだと間違いなく直撃する。

それにしても、このレーザーって生身で受けても平気なのか？ なんか危ない気がするんだけど。

……仕方が無い。アレを使うか。

「……でえあああああッ!」

回避出来ないと悟った俺は、力を解放してあのレーザーを受け止める事に決めた。

魔理沙 Side

わたしが放った『マスタースパーク』は、間違いなくリュウの奴に命中した。

命中した筈なんだけど、レーザーが当たる前に立ち上った赤い光が気に為る。

アイツが何らかの能力を使って、わたしの『マスタースパーク』を防いだって可能性もあるけど、生半可な能力じゃあれは防ぎきれない。

勝敗をはっきりさせる為にも、リュウがどうなってるのか確認した

いんだが……土煙が邪魔でよく見ないな。

「あゝもう！ 土煙が邪魔だな！」

視界の悪さに苛立ちを募らせていると、徐々に土煙が晴れていく。少しづつ煙が晴れていく中、わたしは煙の中に白髪の人様な何かを見つけた。

別に白髪が珍しい訳じゃない。ただ、ソイツの背中に赤い羽の様なモノが付いていたんだ。

普通の人間には羽なんて付いてないし、居るとしたらソイツはきっと妖怪に違いない。

わたしは何かの見間違いかと思い、眼を擦り再度確認をすると……其処にはリュウの奴がいた。

「あれ？ リュウ？」

「そうだけど……どうかしたか？」

「えっ？ あゝ……いや、なんでもない」

「……？」

……そうだよな。よく考えてみれば、今この神社に居るのはわたしとリュウだけなんだし、新種の妖怪があゝの土煙の中に居るわけないよな。

それにしても、『マスタースパーク』を直撃した筈なのに無傷って如何言う事だ？

本当に直撃したのなら、もっと服がボロボロになっても良いと思うんだけど……。

「…なあ、リュウ」

「今度はなんだ？」

「お前、アレを回避出来たのか？」

「いや、直撃したよ。あの速度で放たれるレーザーの回避なんて出来ないうて」

「そう…だよな……」

リュウは直撃したって言うけど、イマイチ腑に落ちないな。

と言うか、直撃していてもリュウがピンピンしてるから、この勝負わたしの負けか？

……初心者に負けたって、物凄く腹が立つな。

「それにしても、あのレーザーとんでもない威力だな。まさかオーラが倒されるなんて思わなかった」

「ん？ リュウ、オーラって何の事だ？」

「あゝ……俺の力とでも思ってくれ。説明すると長いし、今は境内の掃除が先だしな」

「掃除？」

「……周りを見れば分かるよ」

リュウに言われて境内を見渡してみると、割れたビンの破片が辺りに散らばっていたり、爆風の影響か木の枝が散乱していて境内が滅

茶苦茶になっていた。

スペカを使ったのはわたしだけど、此処まで滅茶苦茶になるとは思わなかったな。

いや、自分の魔法の威力に驚かされるぜ。

「このままにしてたら霊夢に怒られるし、さっさと掃除を始めるか」

「それって、わたしもしないと駄目なのか？」

「当然だろ。元凶なんだし」

「……あ、わたし急用を思い出したから帰るな」

「へっ？」

「じゃあなリユウ！ 掃除頑張れよ！」

「ちよっ?! 魔理沙!？」

わたしは箒に跨り、リユウを置いて急ぎの用を片付けに向かうのだった。

決して掃除が面倒だから逃げ出した訳じゃないぜ。勘違いしないように。

魔理沙 Side out

第四話 普通の魔法使い（後書き）

次回予告

夏のある日、幻想郷に突如紅い霧が発生した。

紅い霧は太陽の光を遮り、幻想郷に寒い夏が訪れる。

この異変にリユウと霊夢が立ち上がり、二人は湖に浮ぶ紅い屋敷へと向かった。

竜が辿り着いた幻想郷、第五話『紅霧異変』。

紅い霧の中を巫女と竜が駆け抜ける…。

第五話 紅霧異変（前書き）

約一週間ぶりの更新。

今回は霊夢視点です。

第五話 紅霧異変

私は紅い月が照らす中、紅を基調にした屋敷の庭で空を見上げていた。

地面には、何かの爆撃を受けた様なクレーターが無数に出来ていた。そのクレーターの中には、蝙蝠の翼を生やした少女と銀髪のメイドも居るが、彼女達はクレーターから出ようとはせず、私と同じ様に空を見上げている。

私達の視線の先には何もいないけど、はっきりと強大な力を持った何かが居るのを感じる。

巫女として今まで何度も妖怪には会って来たけど、これ程までに強大な力を感じたのは数える程度しかない。

そのまま空を見上げていると、上空から腕に空色に光る四対の羽を持つ琥珀色の鱗の竜が降りて来た。

降りてきた竜は、攻撃する訳でも喋る訳でもなく、ただ静かに私達を見ている。

あの竜が何故居るのか分からないけど、紅い月を背景に空に浮ぶ竜の姿は凄く幻想的に見えた……。

……

……

……

「——って言う夢を見たのよ」

「……………それを聞いて、俺は如何反応すれと？」

「別に如何とでも」

季節が変わり、春から夏となり半月ほどが経った頃。

私とリュウは神社の仕事を終え、何時もの様に母屋の縁側でお茶を飲んでいた。

夏に入ったと言うのに、幻想郷の空を紅い霧に空を覆われている所為で、今年は薄暗く寒い夏と為っていた。

「ところで霊夢。いい加減、この霧なんとかしない？」

「なんとかねえ」

「異変を解決するのが巫女の仕事だろ？ そろそろ動かないと里の人間の信用を失くすと思うんだ」

「……………只でさえ、参拝客が居ないのに信用を失うのは困るわね」

「だろ？ 俺も手伝うから異変解決に行こう」

「それは良いけど……………なんでそんなに積極的なのよ」

「…俺、寒いのが苦手なんだ」

「そんな格好してるからでしょ」

「似た様な格好をしている霊夢に言われたくない!!」

「アンタのよりは暖かいわよ」

リユウの文句を聞き流しつつ、手元に置いてあったお茶を飲み干し、異変解決の為の準備を始めた。

このまま放置して外の世界の人里に妖霧が届いても困るから、そろそろ動かないと駄目かな〜って思ってたんだけどね。

……それにしてもあの夢、実際の光景の様な現実味があったわね。それにあの竜……まさかとは思うけど、変身したリユウじゃないでしょうね？

「……………」

「ん？ どうかしたか霊夢」

「いや、アンタはどうやって私について来る気なのかなって」

「風の力を使って飛んでいくから大丈夫だよ」

「あっそ。…それなら、自分の身は自分で守りなさいよ」

「分かった」

……こう言っやり取りをしていると、あの夢に出て来た竜とは思えないわね。

と言うか、夢に出て来た竜がこいつだとしたら、アレは予知夢って事になるじゃない。

私にそんな能力は無かったはずだし、アレが予知夢の線は薄いのよね。

「……ま、いつか」

アレが如何言う意味を持つのか分からないけど、今は妖怪退治に専念しよう。

今回は久々の妖怪退治なんだし、派手に暴れようっと。

………

……

…

準備を終えた私とリュウは、神社から飛び立ち『霧の湖』を目指していた。

あの湖を目指している理由は特に無い。強いて言えばなんとなく。ただの勘でしかないけど、私の勘は良く当たるから今回の犯人も湖に居る筈……なんだけど、霧の湖に妖怪なんて住んでたかな？

あそこは年中霧に包まれてるから、暮らしていくには適してないと思うんだけど。

「ところで霊夢。妖怪退治って何をするんだ？」

「そのまんまの事をするだけよ。異変を起している輩を倒す、ただそれだけ」

「……本当にそのまんまなんだな」

「昔は完全に退治してたみたいだけど、今はスペルカードがあるし多少痛い目を見てもらうだけよ」

「スペカなら相手を殺さないと？」

「基本的にはね」

妖怪は兎も角。人間が相手の場合、当たり所が悪いと死ぬ可能性もあるけど……まあ、リユウなら大丈夫でしょ。根本的に人じゃないし。

……そう言えば、妖怪は精神的な生き物だけど、竜はどうなるのかしら？

コイツは私達の理とは違う生物だし、弾幕ごっこじゃ倒せないかもしれないわね。
今はルールに乗っ取って戦うだろうけど、暴走したらそんな事言っ
てられないか。

「そう考えると結構厄介ね」

「なにがだ？」

「アンタの存在がよ」

「なんで俺?!」

「自分の胸に手を当てて、よく考えなさい」

「うゝむ……」

私の言った事を真に受けて、リュウは手を胸に当てて考え始めた。
考えるのは良いけど、考えすぎて木にブツかっても知らない――、

ゴンッ！

「あいだッ！」

――少し遅かったみたいね。

でも、考え始めて直ぐに木にブツかるって言うのも、ある意味凄い
わね。

それだけ集中していたのか、只単にドジなだけか。

……リュウの場合、両方の可能性があるからなんとも言えないわね。

「いたた……。なんでこんな所に木があるんだ？」

「前方の注意を怠ったアンタが悪い」

「そうは言っけど、こう暗いと前が見えないだろ」

「……まあ確かに」

昼間に出発すると悪霊が少ないから、今回は夜に出てみたんだけど
……こう暗いとドツチに進んでるのかも分からないわ。

まあ、飛び回っていれば、その内元凶の元に着けると思っから良い
けど。

そんな調子で空を飛んでいると――、

「ねえ、貴方たちは食べてもいい人間？」

――黒い服を着た、黄色い髪に赤いリボンを巻いた少女と出くわ

した。

いきなりこんな事を聞いてくる辺り、目の前に居るのは間違いなく妖怪ね。

見た目は幼いし、大した力は感じないんだけど……髪に巻いているのは、もしかしてお札？

私はあんな妖怪に会った事ないから、恐らくは先代以前の巫女が封じたんでしょう。

「ねえ、貴方たちは食べてもいい？」

「いや、俺たちを食べたら腹を壊すぞ」

「そーなのかー」

「……なに真面目に返事してるのよ」

「なんとなく？」

「やれやれ……」

「食べれないなら別にいいや。他の所に行こう」

それだけ言つと、黄色い髪の妖怪はそのまま何処かへフヨフヨと飛んでいった。

どうやら今回の件とは関係ないみたいだけど、なんか物足りないわね。

普段は出会った妖怪は片っ端から退治してるから、今回みたいに戦わずに済むのはイマイチね。

「それにしても、あんな小さい子が人を食べるなんて想像出来ない

な
」

「あんなんでも妖怪よ。驚いたりする事じゃないでしょ」

「でも、あの子が人を食べてるとは思えなくて」

「幻想郷じゃ珍しくないわよ」

「すごいな」

「アンタは早く慣れなさいよ」

「努力するよ」

そんな話を話しつつ、私とリュウは霧の湖に向かって暗い夜道を飛んでいった。

道中で妖精や毛玉に出会うけど、大した力もないし適当に撃ち落とす。

はあ。こんな雑魚じゃなくて、ちゃんとした勝負になる妖怪と戦いたいわ。

第六話 湖上の氷精（前書き）

今回はリュウ視点ですが、次回からは出来る限り視点変更はせずに行きたいです。

……とか言いつつ、直ぐに霊夢視点とかになりそう。

第六話 湖上の氷精

幻想郷を覆う紅い霧を打ち払うべく、博麗神社を飛び出した俺と霊夢。

霊夢の直感を頼りに霧の湖に辿り着いたんだが――、

「…………迷った」

――霊夢とはぐれ、道に迷ってしまった。

この湖は名前の通り霧で覆われているから、周囲の確認が出来ないのが難点だな。

俺はちゃんと飛んでいた積もりだったんだけど、気がつくと霊夢の姿はないし、俺は何処を飛んでいるのか分からなくなってしまった。

……別に俺が方向音痴って訳じゃないぞ。本当だぞ。

「しかし、如何したもんかな？」

このまま立ち往生していても仕方が無いんだが、何処に行けば良いのか分からない。

霊夢と合流出来れば一番良いんだけど、彼女が俺の事を捜してるとは思えないな。

となると、俺の方が霊夢を見つけないといけないのか。

「霊夢の事だから、既に元凶の元に辿り着いてそうだな」

それはそれで問題ないけど、折角ついて来たんだから解決する様子を見ておきたい。

……その為には霊夢を捜すしかないか。

「俺にも優れた直感が有れば良かったんだけど、無い物強請りしても仕方が無いか」

そう言い捨てた俺は、霧の中で霊夢を捜す為に動き始めた。動き始めたのは良いが、周りは相変わらず霧ばかりで何が有るのかすら把握出来ない。

下が湖だから、目の前にいきなり巨木が出現したりはしないだろうけど、やっぱり不安になるな。

この霧を一気に晴らす事が出来れば色々と助かるんだけどな。

「……『メタⅡストライク』で、この霧を切り裂いてみようかな？」

あの技は風属性だし、アレだけ巨大な剣なら剣風だけでも霧を吹き飛ばせそうだ。

序でに、この紅い霧の元凶も切り飛ばせたらかなり楽なんだけど……

……それは霊夢に怒らそうだな。

……異変を解決したのに怒られるってなんだよ。

でも、霊夢を怒らせると食事抜きとかありえるから、あんまり怒らせたくないな。

「……うん。『メタⅡストライク』は止めて、牙流風^{ガルフ}辺りにしておこう」

俺は早速魔法を発動させようとしたが、今の姿では使えない事を思い出した。

スペルカードを作っている時に分かった事だけど、どうやら今の姿でもランク2の魔法は使えるみたいだ。

でも、牙流風^{ガルフ}みたいなランク3の魔法は無理だった。

ランク3に付いては、今まで通り竜変身^{トランス}しないと発動出来ないらしい。

……正直な話し、今の姿で魔法が発動するだけでも凄い事なんだが、
今までは、竜変身トランスしてないと魔法が使えなかったからな。この辺りは
力が一つになった恩恵って事なのかな？

「まあなんでも良いか。さつさとこの霧を吹き飛ばそう」

俺は牙流風ガルーフを使うのを諦め、ランクが一つ下の羅風ラフを使う事にした。
右手に風の力を溜め、程よく溜まったところで腕を振り上げ――、

「羅風ラフ！」

――溜めた力を解き放った。

解き放たれた力は旋風となり、俺の周囲の霧を吹き飛ばし視界が利
く様になった。

でも、吹き飛んだのが俺の周りだけだから、この湖の全容を把握出
来た訳じゃない。

それでも、さつきよりは大分マシになったのは確かだ。

「キヤアアアアッ?!」

「……『キヤア』？」

俺の耳に聞き慣れない悲鳴が届き、辺りを確認すると……緑の髪を
左側だけ黄色いリボンで結び、白のインナーと青い服に青いスカー
トをはいた、背中に二枚の羽を持つ少女が風に吹き飛ばされていた。
……周りの状態を考えると、俺の魔法に巻き込まれて吹き飛ばされ
たんだろうな。

でも、妖精ならこの程度の風なんともないと思うんだが、少し加減
を間違えたのかな？

ドボンッ！

「あ、湖に落ちた」

このまま無視して先に行くのも後味悪いし、今回は助けに行くことにしよう。

そう考えた俺は、湖に落ちた少女を救出しに自ら湖に入ってしまった。

……

……

…

「た、助かりました……」

「気にするなって」

湖に落ちた少女を助けた俺は、彼女を近くの岸にまで運んだ。

多少グツタリしているものの、水を大量に飲み込む前に救出出来たので意識ははっきりしていた。

「ところで、君はあんなところで何をしていたんだ？」

「友達を捜していたんです」

「友達？」

「はい。青を基調にしたワンピースを着て、氷の羽に髪に青いリボンをしてるんですけど……見かけませんでしたか？」

「いや、俺は会って無いけど」

「そうですか……」

この子の友達に会っていない事を告げると、彼女はがっかりした様子で肩を落とした。
視界が利かない霧の中に入ってまで捜していたとなると、よほど友達が心配なんだな。

「…もし良かったら、俺がその子を探そうか？」

「え、良いんですか?!」

「まあ、罪滅ぼしも兼ねて」

「はい？」

「あ、コッチの話だから気にしないで。それで、その子の名前は？」

「チルノちゃんって言います。もし会えたら『何時ものところで待ってる』と伝えて下さい。大ちゃんからの伝言と言えば伝わりますから」

「了解。それじゃ待っててね」

「はい」

俺は彼女と別れ、再び霧の中へと飛び込んでいった。
それにしても氷の羽の妖精か……。どうやって飛んでいるのか謎だな。

案外、羽は只の飾りなのかもしれないな。

……

……

…

さっきの妖精と別れ、霊夢探しとチルノちゃん探しを始めた俺だが……探索は結構難航していた。

魔法を使って霧を吹き飛ばしても、視界が良くなる範囲はそんなに広い訳じゃない。

何もしないよりはマシだけど、ドツチに進んでいるのか分からない事に変わりは無い。

「…霊夢の奴、もう元凶の元に辿り着いたかな？」

そう呟くものの、辺りに争っているような物音は聞こえない。
こつも音が聞こえないとなると、本気で霊夢の身が心配に為ってくるな。

俺は幻想郷^{こけ}に来てまだ日が浅いから、霊夢の実力がイマイチ分からないけど……やっぱり心配だな。

「早いとこ霊夢を見つけないとな」

「そこの変なの止まれ！」

「ん？ 俺の事か？」

突然呼び止められた俺は、声が聞こえて来た方に振り向いた。

其処には、妖精から聞いた衣服を着て背中に氷の羽を持つ少女が、自分の腰に手を当てて浮んでいた。

あの妖精の話を聞く限りだと、あの子が『チルノちゃん』で間違い無さそうだな。

霊夢より先に見つけられたのは、運が良かった……と言って良いのかな？

「おい、お前！ ここはあたいのなわばりよ！ 直ぐにどこか他所に行け！」

「そんな事言われてもな……。俺は君を捜してたんだし」

「あたいを探してた？ ……………はっ?! もしかして、あたいを倒して最強の座を手にしようって訳ね?!」

「…………君は何を言っているんだ？」

「そんな事はさせない！ 喰らえ、氷符『アイシクルフォール』！」

「いきなりかよ?!」

何を如何勘違いしたのか知らないが、妖精は左右から氷の塊を俺に

向かって放って来た。

放って来たんだけど、如何言う訳か正面には弾幕が張られていなかった。

一瞬何が何かと警戒したけど、あの子の様子を見る限りだとそれは無さそうだ。

俺は左右から来る弾を避けつつ、氷の妖精との間合いを詰め、力を弾に見立て連続で叩き込んだ。

「んぎゃッ!？」

「……少しは落ち着いたか？」

「……この程度じゃあたいはやられたりしない！」

「いや、それより俺の話を——」

「次はこれよ！ 凍符『パーフェクトフリーズ』!!」

「——頼むから聞いてくれよ!!」

俺の叫びも空しく、氷の妖精は次のスペルカードを発動させた。

今度のカードはさっきのと同じ、様々な色の弾をばら撒いて来た。

なんの法則も無くばら撒かれたけど、この程度なら慌てる必要は無いな。

今度は間合いを詰めないで、離れたところから弾を放っていれば大丈夫だろう。

「ふふん、甘いわね」

「……?」

「今だ、凍れ!!」

あの子がそう言うと、さっきまでバラバラに飛んでいた弾幕が凍り付いた様に一斉に止まった。

お陰で俺の周囲は動きの止まった弾だらけになっている。

動きを止めたのは凄いと思うけど、止まっている弾なら避けるのは簡単だな。

一応あの子も別の弾幕を放ってはいるけど、距離をとっているから回避は難しくない。

「なんで当たらないのよ!」

「だって避けやすいし」

「むう。それならこれは如何だ!」

「今度はなんだ?」

「動け!」

氷の妖精がそう言うと、止まっていた弾が不規則に動き始めた。

動き始めたけど……弾の速度はかなり遅いから、落ち着いていれば回避は楽なもんだ。

早いとこさっきの子の伝言を伝えたいし、霊夢を捜さないと行けないからこれで決めるか。

俺はポケットに入っていたスペカを適当に取り出す。

一度カード名を確認して――、

「旋撃『烈風撃』!」

——取り出したスペカを宣言した。

このタイミングで宣言するとは思ってなかったのか、妖精は動きを止めて身構えた。

なんで止まったのか知らないが、俺からすると動きが止まってくれたのは好都合。

俺はあの子との間合いを詰め、右腕に風を纏わせる。

そして風を纏った掌で、彼女のおなかを軽く押し出した。

「ん？ なんともない……って、うわッ?!」

押し出された妖精は、突如発生した突風に煽られて吹き飛ばされた。見た目が幼い少女と言う事もあって、かなり手加減して叩き込んだけど……予想以上に風が強いな。

この技って、其処まで強い風を発生させたりしない筈なんだけども……とりあえず、今後はもうちょっと加減して使うか。色々と危ないし。

「なに今の?! 弾が飛んでこなかったわよ!？」

「だって弾幕じゃないし」

「そんなのヒキョーよ!！」

「……そんな事言われてもな」

俺が作ったスペカは、元々俺が使える技や魔法を元にしてるから弾幕に為らない物が多いんだよな。

ちゃんとした弾幕に出来た奴もあるけど、威力が高い技が多いんだよ。

バル系の魔法なら、まだ弾幕っぽいんだけど……アレも微妙な線か。

「ヒキヨーな技を使ったから、今回はあたいの勝ちね」

「なんでそうなるの?!」

「アンタがヒキヨーな技を使ったからよ!」

「いやいや、霊夢は大丈夫だって言ってたけど?!」

「そんなの知らない!」

だ、駄目だこの子。話しが全然通じない。

別に勝ち負けを気にしてる訳じゃないんだけど、話を聞いてくれないしな。

あの妖精の伝言を伝えるだけなのに、なんでこんな面倒な事になるんだ……。

「分かったら早く此処から——」

「やっと見付けたわよ、リュウ。全く、何をやってるのよ」

「あ、霊夢」

あの妖精を如何しようか悩んでいると、霊夢がこっちにやって来た。正直な所、俺を置き去りにして先に進んでいると思ってたからちよつと驚いた。

「ほら、先を急ぐんだからさっさと行くわよ」

「それは分かってるんだけど……」

「分かってるなら早くする」

「——だあー！ あたいを無視するな！！」

「なによ。コッチは急いでるんだけど」

「その变なのを最初に見つけたのはあたいよ！ 後から来てしゃしやり出ないでよね！」

「なに訳の分からない事を言ってるのよ」

「分からないってなによ！」

なんだかへんな事に為って来たぞ。

あの妖精は恐いもの知らずなのか、霊夢にイチャモン付けるし。

霊夢は霊夢で、手にお札を掴んで何時でも投げられる様にしてるし

……一触即発な空気に為りつつあるぞ。

此处で時間を食っている訳にもいかないし、まずはあの妖精をなんとかしてみるか。

「あゝちよつと良いかな？」

「…なによ」

「大ちゃんからの伝言で『何時もの所で待ってる』だって」

「それ本当？」

「うん。大ちゃんは君の事を捜してたみたいだから、早く行ってあげたら？」

「分かった、そうする」

落ち着いて話せば分かる子なのか、氷の妖精は急いで飛んでいきこの場を後にした。

これでいきなり襲い掛からなければ楽なんだけどな。あの性格じや無理そうかな？

「…なんなのアレ？」

「気にしたら負けなんじゃない？」

「まあ良いわ。さつさと行くわよ、リュウ」

「了解」

色々と遭ったけど、なんとか霊夢と合流出来た俺は、今後こそ元凶の元へと向かうのだった。

……それにしても、烈風撃なんかの体術は卑怯なのかな？

もしそうになると、通常時に使えるスペカがかなり制限されるんだよな。

一番マシなのは『散烈拳』くらいか。手元に剣があれば『せんぎり』も使えたんだけど…まあ、仕方が無いか。

第七話 華人小娘

霧の湖で迷子になった俺は、なんとか霊夢と合流することが出来た。その途中で出会った氷の妖精に、行き成りヒキョー者呼ばわりされたけど……風を纏って殴るのは卑怯なのか？ ……この騒動が終わったら、もう一度スペカの構成を考え直してみよう。

深い霧の中を霊夢と二人で飛んでいると、霧の向こうに紅を色調にした屋敷が見えてきた。

湖から立ち込める霧の所為でまだ輪郭しか見えないが、その建物が紅い事だけははっきりと分かる。

この霧の中でもはつきりと色が分かるなんて、あの屋敷を立てた人物はどれだけ紅が好きだったんだろ。

「アレが、今回の異変の犯人が居る屋敷ね」

「その根拠は？」

「『紅』繋がり」

「……無理矢理すぎと思うけど？」

「うっさいわね。私の直感を信じなさい」

「信じてない訳じゃないけど、根拠が余りにもずさんだから」

「根拠なんて如何でも良いのよ。間違ってたら別の犯人を捜すだけだし」

「……異変解決って、そんな感じで良いんだ」

「そうよ。分かったら、さっさと突撃するわよ」

そう言うと霊夢は、あの紅い屋敷目指して先へと進んでいった。
俺も彼女を見失わない様に慌てて後を追いつけた。

……
……
……

屋敷に近づくに連れて、妖精や毛玉みたいなからの攻撃が激しくなってくる。

俺は放たれる弾幕の厚さに驚いているが、前に行く霊夢には大した事ではないみたいだ。

現に霊夢は、妖精達の弾幕の隙間を掻い潜って、逆に撃ち落としている。

俺は避けるで精一杯で、彼女みたいに上手く撃ち落とす事が出来ないでいる。

言い訳みたいになるが、元々俺はこう言った撃ち合いの経験が殆ど無い。

あの世界では剣を使って戦っていたし、トランス竜変身した後は肘打ちやブレス攻撃をしていた。

魔法も確かに存在しているけど、それ等は仲間達に任せてたな。
それに俺の知っている魔法も、魔理沙の様スペカみたいなのと違う

から、回避の参考には為らないんだよな。

「ちょっとリュウ。さっきから後ろでフラフラ飛んでるけど、そんな調子じゃ落とされるわよ」

「解ってるけど、まだ色々と慣れなくて」

「だったら今の内に慣れておきなさい。幻想郷で暮らす心算なら尚更ね」

「なんとか頑張ってみる」

「今すぐ慣れなさいよ」

「それは無理だつて」

霊夢は無茶振りしてくるけど、流石にこの短いやり取りの間に慣れるのは無理だつて。

幾ら俺が竜だからって、出来ない事も結構あるんだぞ。

空を飛ぶのはまだしも、弾幕の回避は身体が付いてこれないから結構キツイし。

眼で弾幕の軌道は把握出来てるんだけど、身体の方が間に合わないんだよな。

……この辺りは経験を重ねて、慣らしていかないと駄目か。

「其処の二人、止まれ！」

「ん？」

俺達を呼び止めたのは、何処かの民族風の衣装を着て、『龍』と言

う文字が彫られた星型のバッチの付いた帽子を被った、紅い長髪の少女だった。

少女なんだけど……こんな所に人間の少女が居るわけないよな。そうなると、彼女も妖怪って事に為るんだけど……見た目が普通の人間と大差ない。

この世界の妖怪って色々と変わってるよな。見た目的な意味で。

「貴方達、侵入者ね。大人しく立ち去るなら良し。立ち去らないと言うのなら……此処で排除します！」

「はいそうですかって、こっちもやられる心算はないわよ」

霊夢がそう言うと、二人は弾幕を放ち戦い始めた。

俺は邪魔に為らない様に、少し離れたところで様子を見る事にした。

紅い髪の少女は、青い弾をばら撒く様に飛ばしたり、移動してから自分の周囲に赤い弾を飛ばしてくる。

霊夢は弾幕の隙間を掻い潜り、大量の札や針を飛ばし確実に命中させている。

彼女の弾幕は紅い髪の少女の様に周囲に広がらないが、射線上に入ってしまうと回避が難しい。

そんな弾幕を喰らい続けた少女は――、

「こうなったら……華符『芳華絢爛』！」

――1枚目のスペルを取り出し宣言した。

宣言した少女は動きを止め、赤と黄色の弾幕を全方位に放ってきた。波状攻撃の様に放たれるソレは、少し離れたところに居る俺にも襲い掛かって来る。

弾幕の軌道を読んでなんとか避けているけれど、放たれる感覚が短

いから避けるのがかなり辛い。
こう言うのを見ると、妖精が放ってきた弾幕が可愛く見えるから困る。

一方霊夢は、最低限の動きで弾幕を掻い潜り回避していた。
弾の方も、相手が動かなくなったからさつきよりもスムーズに当てている。

幾らごっこ遊びとは言え、アレだけの弾幕を眉一つ動かさずに回避出来るのは凄い事だと思う。
そのまま攻撃を続けていると、突然少女の弾幕が止んだ。

「くそ、こうなったら背水の陣だ！」

紅い髪の少女はそう言い捨てると、わき目も繰らず一目散に後退していった。

……それにしても『はいすいの陣』か。懐かしいな。
頑張っただけなのに、結局使いこなせなかったけ。

「あんた一人で『陣』なのか」

「いや、一人でも『はいすいの陣』は使えるぞ」

「あれ、そうだったけ？」

「うん。でも、アレを使うと防御力がゼロになるから使い所が難しくて」

「……それはリュウのスキルの話でしょ」

「違うの？ 俺はてつきり、彼女も同じスキルが使えるもんだと」

「そんな訳無いでしょ」

霊夢にツッコまれつつ、俺達はさっきの少女の後を追いかける事にした。

彼女が逃げた先に、あの紅い屋敷もあるし、倒すついでに屋敷に乗り込む心算の様だ。

……いや、乗り込むついでにあの子を倒すのか？ まあ、どっちでも良いか。

………

………

…

「追って来るなよー！」

「別にアンタを追いつけてた訳じゃないわ。私達は、あの紅い屋敷に用があるの」

「あの屋敷には何も無いって」

「……何もねえ」

少女の背後に聳え立つ紅い屋敷。
ただの紅い壁の屋敷である筈なのに、周りの雰囲気と相まって物凄い存在感がある。

……それに、この屋敷には何か潜んでいるみたいだ。

俺は霊夢みたいに勘が良い訳じゃないけど、長い事戦い続けてたから何となく解る様になった。

これだけの雰囲気醸し出しておいて、何も無いって言うのは流石に信じられないな。

「それはコツチで判断するわ。だから其処を退きなさい」

「そんな事をしたら、私がお嬢様に怒られるじゃない」

「知った事じゃないわね。如何しても退かないって言うなら、無理矢理にでも退かせるだけよ」

「……さつきと立場が逆になっているのは気のせいだろうか？」

「男が細かい事を気にすんじゃないの」

「お仕置き回避の為に、此処は絶対死守してみせる！！」

そう言う和红い髪の少女は、霊夢に向かって波状型の弾幕を放ってくる。

波状型と言っても、さっきのスペカよりも弾幕は薄く、俺でも簡単に回避出来る様な品物だ。

この程度の弾幕、霊夢も当然の様にかわし、彼女に大量の針を放つて行く。

今のままでは不味いと判断したのか、彼女はポケットから一枚のカードを取り出した。

「虹符『彩虹の風鈴』！」

彼女が宣言したスペカは、様々な色の弾が渦を描きながら全方位に放つと言つものだ。

放たれる弾幕は、見る角度によつては虹にも見えるが……個人的にはさっきの方が脅威だったかな？

密度で言えば、この弾幕よりもさっきの方が厚かった様に思えるし、隙間もこつちの方が多い。

そんな事を考えていると、霊夢が彼女のスペカを破っていた。

「また破られた！？」

「この位余裕よ。さあ、次のカードを宣言しなさい。次も破つてあげるから」

「ぐぬぬ……」

「門番さ〜ん！」

「ッ?! み、皆さん。来てくれたんですか!？」

屋敷の方から声が聞こえて来たと思ったら、赤いメイド服を着た六人の妖精がやって来た。

なんでメイド服を着ているのか物凄く疑問だけど、これは援軍登場つて事だよな。

妖精くらいなら霊夢だけでも大丈夫だろうけど、俺も加勢した方が良いのか？

「霊夢。俺も手伝おうか？」

「別に良いわ。アンタは其処で見てなさい」

「いや、でも……」

「妖精が増えた程度でやられたりしないわよ」

「……分かった」

霊夢は必要ないって言うけど、やっぱり少し心配だな。

確かに加勢に来たのは妖精だけど、現状としては七対一な訳だし……。

……霊夢には悪いけど、もしもの時は加勢に入ろう。

「「「「「キャアーツ?!」」」」」

「み、皆さーん!？」

「どれだけ群れても、所詮は妖精よね」

「……うわあ」

今の一瞬に何が起こったかと言うと、霊夢が六人のメイド妖精を撃ち落とした。

いや、確かに妖精だけとき。倒すの早過ぎじゃないかな。

妖精も妖精で、もう少し頑張れと言いたい。幾らなんでもあつさりやられ過ぎ。

「よ、よくも皆さんを……」

「いきなり入って来る方が悪い」

「くっ。……ならこれは如何だ！ 彩符『極彩颱風』！！」

今度彼女が宣言してきたスペカは、様々な色の弾を全方位にばら撒くと言うものだった。

なんの法則性も無くばら撒かれる弾は、弾幕に大きな隙間を作るが弾の軌道が読みにくく厄介だな。

……まあ、そう感じているのは俺だけで、霊夢には何の問題も無いようだ。

現に今も霊夢は余裕で回避して、自分の弾を彼女に当てているし。霊夢の場合、弾の軌道が読めていると言っか、何が来ても動じないって感じだな。

只単に興味がないだけって気もするけど、此处まで冷静に動けるのも凄いな。

「これで終わり！」

「うわぁー！」

気がつくと、霊夢は彼女のスペカを攻略し終わっていた。

どうやらさっきのが最後だったらしく、彼女は地面に大の字に為って倒れた。

結局霊夢は一枚もスペカを使わずに、門番と呼ばれた少女のスペカを攻略していた。

俺だったら何枚か使ってそうだし、この辺りは俺と霊夢の実力の差かな。

「さて、通させてもらっわね」

「済みません、お嬢様」

「……終わってみれば圧倒的だったな」

「当然でしょ。寧ろリュウが心配し過ぎなのよ」

「そりゃ、霊夢は大切な人だし。心配するのは当然だろ」

「……莫迦な事言つてないで、さっさと行くわよ」

「えっ？ 俺、今変な事言つた？」

「言つた言つた。だから早く行くわよ」

霊夢はそれだけ言つと、ドンドン先へと進んで行つた。

それにしても、俺そんなに変な事を言つたかな？ 居候とは言え一緒に暮らしているんだし、霊夢が怪我をしないか心配するのは当然だと思つんだけど。

……もしかして、言い方が変だったのか？ でもこの場合は、なんて言えば良いんだ？

「うゝむ……」

「ちよつとリュウ！ 先を急ぐんだから、早く来なさいよ！」

「あ、ごめん！」

……とりあえず、ここら辺の事も異変が片付いた後で考えれば良いか。

今は紅い霧をなんとかする方が先だしね。

第七話 華人小娘（後書き）

オマケ

全く。リュウの奴、いきなり何を言い出すのよ。

私の事を心配しだしたと思ったら、突然『大切な人』だなんて訳が分からないわ。

第一、私の心配をするよりも先に自分の心配をしなさいって。

あの門番の弾幕に何度か落とされかけてた癖に、如何して私の心配をする余裕があるのよ。

まあ、アイツは人じゃなくて竜な訳だし。多少落とされた程度なら大丈夫な気がするわ。そこらに居る妖怪だって、只のごっこ遊びじゃ死なないんだし。

……それにしても、あんな事言われたの初めてだったな。

リュウの事だから、何も考えないで適当に言っただけって可能性も強いけど。

……でもまあ、悪い気はしないかな。

「待ってくれよ霊夢」

「遅いアンタが悪い」

「酷いな」

コイツの真意は如何であれ、今は妖怪退治が先決。

こんな異変さつさと片付けて、布団に入って早く寝たいわ。

第八話 知識と日陰の少女

門番を撃退し、紅い屋敷に入った俺と霊夢。

屋敷の内装も外観と同じく紅を色調にしているが、灯りがロウソクだけだから全体的に暗い印象を受ける。

今の時刻が深夜だからかもしれないが、もう少し明るくても良いと思う。

「それじゃ、私は左側を調べるから、リュウは右側を調べてきて」

「へっ？ 二手に別れて調べるのか？」

「そっちの方が効率良いでしょ。それじゃ頼んだわよ」

霊夢はそれだけ言うと、さっさと左側を調べに行ってしまった。

何か一言かけようと思ったのだが、特に言葉も思いつかず、そのまま右側を調べに行く事にした。

………

……

…

屋敷を調べていると、当然の如くメイド服を着た妖精達が襲ってくる。

なんとかそれを撃退して行くんだけど、今まで放って来た妖精の弾幕よりも厚いから結構辛い。

妖精に苦戦しているのに、この屋敷の主と戦う事に為ったら如何し

よう。

仕えてる妖精でコレだから、主はもつと凄いんだろうな。

……最悪の場合は、竜の力を使うしかないか。

霊夢も居るんだし、暴走しても多分止めてくれるだろう。

でも、暴走するような竜は使いたくないな。

出来る事なら『ジャブジブ』や『ナイト』辺りでケリを付けたいところだ。

「つて、なんだこれ？」

屋敷の中を彼方此方調べていると、地下への階段を見つけた。

俺はこの屋敷に地下室は無いモノだと思っていたから、この階段の発見は予想外だった。

まだ探索していない部屋もあるけど、犯人が下に居る可能性もあるし、まずは地下の探索を済ませよう。

そう考えた俺は、階段を降りて一人地下の探索を開始した。

地下に降りてまず驚いたのは、その広さだった。

俺はてつきり部屋が一室あるだけだと思っていたんだけど、階段を降りた先にあったのは長い廊下だった。

場所が地下だから当然窓はなく、廊下を照らすのは壁に備え付けてあるロウソクの灯りだけ。

その所為で、この廊下は一階よりも薄暗く不気味な感じがする。

とは言え、この程度の不気味さで恐れるほど生易しい経験はしていない。

あの世界での旅で、此处以上に暗い場所や不気味な場所を探索して来たんだ。この程度ならまだ優しい位だ。

……不気味なところは本当に不気味だからな。変な度胸はついた気

がするよ。

「ほんとあの場所はきつかったな……って、今は思い出に耽っている場合じゃなかった。早く探索を終わらせないと」

頭を切り替えた俺は、薄暗い地下の廊下の探索を開始した。

その道中でまたメイド妖精達に襲われるが、苦戦しつつなんとか撃退して行く。

次に団体で来たらスペカを使おうか考えていると、前方に大きな扉を発見した。

ただの地下室の扉にしては大きく、地下牢にしては扉のデザインが豪華な気がする。

他に地下に有りそうな部屋を考えるけど、特に思い浮かばず。

結局、何も考えずにその部屋に入る事にした。

「さて、鬼が出るか蛇が出るか……」

俺が扉を開けると、其処には大量の本とそれを納める大量の棚があった。

この見た感じからして、恐らく此処は屋敷の図書館と言った所なのだろうか。

……正直な話、此処まで大量の本を見た事が無いので軽く引いた。

本を納める棚の一つ一つのサイズが大きいし、其処に収まっている本の数もまた凄い。

この部屋がどれだけ広いのか知らないけど、よく此処まで集めたに関心するよ。

でもこの本って管理は如何してるんだろ？ これだけ多いと、一・二冊無くなっても分からないんじゃないのか？

「……一冊くらいなら持って行ってもバレナイかな？」

「持っていないでー」

「うおッ?! 誰だ!？」

突如上から声が聞こえ、慌てて上を見上げると紫のラインが入ったワンピースに、薄紫の帽子とカーデガンを来た紫色の髪の少女が浮んでいた。

見た目は完全に人なんだけど、門番の例もあるし、彼女も人間じゃないんだろうな。

なんでこうまで人型の妖怪が多いんだろ。何か意味でもあるのかな? ……いや、そんな事を言い出したら俺も人型の竜になるのか。

「今、私の本を持って行くとか聞こえたんだけど？」

「確かにそう言ったけど、俺の本来の目的はこの屋敷の主探しかな」

「あら、レミイに用事なの」

「（レミイ?）…ちょっと霧を止めて欲しくて」

「そう。だったら貴方を会わせる訳には行かないわね」

「出来れば穏便に済ませたいんだけど……」

「無理に決まってるでしょ。あの子我が俤だもの」

「さいですか……」

「……ところで、貴方だね？」

「俺の名前はリュウ。ただのリュウだ」

「私はパチュリー・ノーレッジ。ただの魔法使いよ」

簡単な自己紹介を終えると、パチュリーは青白い光線を放って来た。俺は上に飛んでその光線を回避するけど、その後直ぐに移動して全方位に赤い弾幕を張って来る。

その弾幕も隙間を縫って避けるんだけど、また移動して次は光線と弾幕の合わせ技で攻めてきた。

弾幕の回避は出来るんだけど、彼女が彼方此方移動するもんだからコツチの攻撃がイマイチ当たらない。

なんとか頑張って弾を放つけど、やっぱりこう言う戦闘は苦手だ。

「……水符『プリンセスウンディネ』」

スペカを宣言すると、パチュリーは三本の水のレーザーと無数の水の弾丸を放って来た。

それ等をなんとか避けたと思ったら、その直後に大粒の水の弾丸が一斉に放たれた。

弾の速度事体は其処まで速くないけど、一度に放たれる弾の数が多い。

隙間を縫うように回避しても、直ぐにさっきと同じレーザーと小粒の弾丸が襲い掛かってくる。

お陰で避ける事に集中してないと不味い状況に……って——、

「——これは無理だ」

気がつくと俺は、壁際にまで追い詰められていて、目の前にはレー

ザーが迫っていた。

既に回避出来るスペースも無く、被弾する事は誰の眼にも明らかだからと言って、このまま喰らう心算もない。せめてお返しくらいはしないとな。

「散弾『散烈拳』！」

俺は当たる直前にスペカを取り出し、拳に力を込めて前に突き出した。

突き出した拳から放たれた力は、散弾の様に拡散しパチュリーの弾幕を掻き消して行った。

命中こそはしなかったが、これで彼女のスペカを破る事が出来た……
…等。

「……貴方、もしかしてうちの門番みたいに気でも使えるの？」

「いや、俺のはそう言うのとは違うものだけど」

「そうなの。…随分と変わってるのね」

イマイチ自覚はないんだけど、俺ってそんなに変わってるのかな？
霊夢にもさっき似た様な事言われたし、やっぱり変わり者なのかな。

「それじゃ次行くわよ。…木符『シルフィンホルン上級』」

パチュリーの二枚目のスペカは、水の弾幕ではなく木の葉の弾幕だった。

さっきの弾幕とは違い法則性はなく、舞い落ちる葉の様に辺りには撒かれる。

そこら中からばら撒かれるもんだから、どの弾に注意して避ければ

良いのか分らない。

目の前だけに集中していると、突然横から弾が飛んでくるし、左右に集中すると前方不注意になる。

全体的に把握しないと行けないんだけど、そんな余裕は今の俺にはない。

「だーッ！ 避け難い！！」

「簡単に避けられたら勝負にならないじゃない」

確かに彼女の言っている事は正論だけど、それでも文句の一つは言いたい！

魔理沙の星屑も面倒だったけど、この弾幕はそれよりも面倒だ！！あの弾幕はコレと大差ない速度だったけど、此処まで細かく散らばってなかったぞ！

……いや、これは弾の大きさによるところがデカイのか。

「考え事するのは勝手だけど、そんなんじゃ当たるわよ」

「へっ？ ……あいだッ？！」

ぐおー……。余計な事を考えすぎた。

お陰で迫って来ている弾に反応が遅れてしまい、ついに被弾してしまった。

まあ、この程度でやられる俺じゃないし、今はこの弾幕の攻略に集中しよう。

木の葉はまだ辺りに散らばっているけど、何度も同じ失敗を繰り返したりはしない。

辺りに舞い散る弾幕なら、風で全部吹き飛ばすだけだ！

「疾風『風』！」

「キヤアツ?!」

俺がスペカを発動させると、名前の通り風が巻き起こり、弾幕ごとパチユリーを吹き飛ばした。

今の風で彼女の弾幕を止める事が出来たけど、スペカってこう言う使い方であってるのか？

この調子で使っていくと後々困りそうだな……。

「うう……。まさか室内で突風に襲われるとは思わなかったわ」

「これでも一番ランクの低い風なんだけど……」

「……アレでねえ」

俺が風のスペカを使った事で、室内は倒れた本棚で滅茶苦茶になってしまった。

もしコレで最上位の牙流風^{ガルフ}だったら、もっと酷い事になってそうだな。

最低ランクでこの威力だとすると、真重属魔法はどうなってるいるのやら……。

「まあ、本棚は後でこあやメイド達に直させるとして……続きを始めるわよ」

「やっぱ、この程度で終わる訳ないか」

「当然でしょ。……それじゃ三枚目。水&木符『ウォーターエルフ』

」

彼女の三枚目のカードは、大粒の水弾と小さい木の弾を連続で放ってくる物だった。

放たれる割合で言えば木弾の方が多く、水弾の数は多くない。ばら撒く様に放つ木とは違い、水の方は何処と無く俺を狙って来ているみたいだ。

それでも、さっきの弾幕よりも弾の軌道は読める方だ。

……まあ、飽く迄も読めるだけであって、絶対に回避が出来ると言う訳でもないけどね。

とりあえずは、手持ちのスペカを消費しないで避けられているから良いか。

「……このスペカじゃ倒せそうに無いわね」

少しの間避け続けているとパチュリーはそう言い出し、放っていた弾幕を撃ち止めた。

その代わり懷からに別のスペカを取り出し――、

「金&水符『マーキュリポイズン』」

――そのカードを宣言した。

四枚目のスペカは水の弾と金属の弾の複合弾幕。

弾は左右から挟撃する形で放たれる為、弾の軌道が把握し辛い。

把握し辛いが左右から同時に教われないだけマシか。

それに放たれる弾のサイズもそこまで大きくないし、距離さえ離していれば隙間を縫う事が出来る。

後は動き回る彼女に、コツチの弾幕を放ち続ければ勝てそうだ。

「むう。中々当たらないわね」

「そう何度も被弾したくないんでね」

軽口を叩きつつパチュリーの弾幕を避け続ける。
その隙をついてコッチの弾を放っているけど、向こうも中々当たってくれない。

このままだとジリ貧になりそうだし、此処はスペカを使って一気に決めるか。

俺はポケットから一枚のスペカを取り出した。

「蒼雷『ババル』！」

カードを宣言すると、四方から蒼い雷がパチュリーに襲い掛かった。
パチュリーも急いで回避しようとするが――、

「むきゅーッ！」

――俺の雷の速度の方が速く、回避出来ずに地面に落ちていった。
落とす事が出来たとは言え、まだ他にもカードを持っているかもしれない。

念のためにも、もう少し警戒しておくかな。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「…………あれ？」

何が起こっても良い様に警戒していたんだけど、パチュリーが動く気配はなく地面に倒れたままだった。

一瞬何かの罠かと思ったけど、特にそんな様子は無さそうだな。だとすると、なんで倒れたままなんだ？ 一応とは言え、弾幕にしているから死んだりはしないと思うんだけど。

「おい、大丈夫かー？」

「…しびれて、うごけない……」

「あ、あはは……」

どうやら彼女は、ババルを受けて身体が痺れたみたいだな。

それじゃ、どれだけ警戒しても何もしてこない訳だ。

……でも、あの魔法にスタン効果なんて付いてたか？ あんまりこの魔法使わないから、よく覚えてないんだよな。

「とりあえず、この勝負は俺の勝ちで良い？」

「すきに、して」

「分かった。（……勝ったのにこれじゃ素直に喜べないな）」

「あと、ここにれみはいないわよ……」

「そうなのか？ ……だったら此処に用はないか」

「なら、さっさといきなさい……」

「ああ。…それじゃあなパチュリー。ゆっくり休んでくれよ」

「いわれなくても……」

こうしてパチュリーとの戦いに勝った俺は、図書館から出て別の場所の探索に向かった。

今回の戦いで結構スペルを消費したから、今残っているカードを確認してみると……今の状態で使えるカードが殆ど残っていないかった。

トランス
竜変身すれば少しは増えるんだけど、それでも不安は尽き無い。

……やっぱり攻守で一番バランスが良い『カイザー』を使うしかないかな。

出来る事なら使いたくないけど、俺の腕前じゃ無理そうだ……。

「ハア。憂鬱だ……」

第八話 知識と日陰の少女（後書き）

オマケ

リュウが図書館から出て行った後。

倒れているパチュリーの傍に一匹のコウモリが近付いて来た。

「……これで良かったのレミィ？」

《ええ。ありがとうパチエ》

パチュリーがコウモリに話しかけると、喋る筈の無いコウモリが少女の声で返事をした。

彼女はその事になんの疑問も持たず、そのまま話し始めた。

「彼に会いたいから負けてくれなんて、面倒な注文してくれたわね」

《あら。パチエも彼の力を見て良かったじゃない》

「……咲夜も居るんだし、別に私が戦う必要は無かったと思うけど」

《咲夜じゃ駄目よ。彼を本気にさせる前に倒しちゃうもの》

「私でも本気は出さなかったみたいだけどね」

《なら、私が彼を本気にさせてあげるわ》

「……お願いだから図書館に被害が出る様な事はしないでよ」

《それは竜次第かれね》

そう言うとコウモリは何処かへと飛んで行き、パチュリーは何事も無かったかの様に起き上がった。

そして辺りを確認すると、部屋の惨状を見て大きな溜息を吐いた。

第九話 紅魔館のメイド（前書き）

今回は霊夢視点の話です。

第九話 紅魔館のメイド

リュウと別れて紅い屋敷を探索しているんだけど、一向に犯人らしき人物が見付からないわね。

この屋敷、見た目以上に中が広いから彼方此方捜して回るのも面倒だわ。

私としては、早く犯人を取っちめたいんだけどな。

……もしかしてリュウが向かった方に居るのかも。それなら私が行けば良かった。

「あゝあ。いい加減妖精を倒すのも飽きて来たわね」

「だったら、倒さないでスルーすれば良いでしょ。掃除する身にもなりなさいよ」

「そんなの私の知った事じゃないわ」

私の前にいきなり現われたのは、銀の短髪のメイド。

それにしても、今まで気配も無かったのに急に現われたわね。

どんな手品を使ったのか知らないけど、そこら辺にいる妖精よりは手強そうね。

「それでなに？ お嬢様のお客様？」

「（倒しに来たと言っても、通してくれないわね）」

「通さないわよ」

「まだ何も言っていないんだけど」

「どんな目的でも関係ないわ。お嬢様には既に先約が入ってるのよ」

「こんな真夜中に尋ねるなんて、そいつは随分と物好きね」

「貴女だって、真夜中に侵入して来たじゃない」

「侵入するなら、真昼間よりも真夜中の方が雰囲気あるでしょ」

「そんなの知らないわよ」

そう言くとメイドは、四つの魔法陣を展開し全方位に弾幕を張って来た。

それと同時に、本人は隠し持っていた銀のナイフを私に向かって投げつけて来る。

全方位に弾幕を張るだけならまだしも、メイドが投げてるナイフが厄介ね。

数こそ少ないけど、偶に弾幕の影に隠れて発見が遅れるのよ。

全く。何処にナイフを隠しているのか知らないけど、馬鹿みたいに投げて来るんじゃないわよ。

「……流石に当たらないわね」

「この程度の弾幕に当たる訳無いでしょ」

「そう。ならこれは如何かしら？ 幻符『クロックコープス』」

メイドが一枚目のスペカを宣言すると、全方位に弾幕を張って来た。でも、ただそれだけの事。只単に辺りに弾を撒き散らすだけなら如

何と言う事は……って!?

「何時の間にナイフ投げたのよ!？」

「さあ？ 何時かしらね？」

今、私の周りには最初に放った弾幕以外にも、無数の銀のナイフが投げられていた。

しかも、ナイフの方は全て私に狙いを付けているみたい。

何時の間に投げたか分からないけど、面倒な事この上ないわね。

でも気をつけないといけないのは、先に放たれた弾幕の方。

今度は投げられたナイフの数が多いから、散らばっている弾幕がナイフの影に隠れちゃってるのよね。

だけど、ナイフが私狙いなら引き付けて避ければ大丈夫。

先に放ってきた弾幕の数は少ないし、ナイフを避けた後でも回避は間に合う筈。

「あら。思ったよりやるのね」

「当然でしょ。私を誰だと思ってるのよ」

「働かない事で有名な神社の巫女でしょ」

「失礼ね。ちゃんと働いてるわよ……ウチの居候が」

「貴女が動かないんじゃない」

「私の専門は、妖怪退治や異変解決だから良いのよ」

「……私は貴女の言う居候に同情するわ」

「それは如何言う意味よ」

「言葉の通りよ」

……一々余計な事を言うメイドね。

それにこれは私とリュウの問題であつて、赤の他人であるメイドに同情される筋合いはないわよ。

コレ以上余計な事が言えない様に此処で徹底的に叩こうかしら？

「考え事とは余裕ね」

「実際の所、余裕だからね」

「ならこれは如何かしら？ 幻象『ルナクロック』」

メイドが宣言した二枚目のスペカ。

まずは全方位に弾幕を張るだけだけど、さっきの事を考えるとまたナイフが飛んでくるわね。

どんな風に飛んでくるのか分からないけど、何時でも後ろに下げられる様にしておこう。

案の定私の予想は的中し、また突然銀のナイフが投げられていた。

だけど今度は、私狙いのナイフ以外にもばら撒かれる様に投げられたナイフも存在する。

でも、ばら撒かれたナイフが追加された位で、さっきのスペカと大差ない。

その程度の差異しかない弾幕の攻略なんて、そう難しいものでもないわ。

「……これでも駄目か」

「唐突にナイフを出現させるのは良いけど、それだけじゃ私は落せないわよ」

「なら、搦め手で攻めさせて貰うわ」

そう言うとメイドは、無数のナイフを四方に投げ付け始めた。でも私が居るのは彼女の正面。後ろや左右に投げても当たる訳が無い。

彼女の言う『搦め手』が何か知らないけど、正面以外のナイフにも気をつけた方がよさそうね。

私はナイフの軌道に注目していると、壁にぶつかったナイフが跳ね返りコツチに襲い掛かって来た。

コレは所謂『跳弾』って奴かしら。手品以外にもこんな芸当が出来るなんて、意外と芸達者ね。

でも、種さえ解れば大した脅威じゃない。

何も無い空間から飛んでくるんじゃないで、ただ壁に当たって跳ね返っただけ。

跳ね返ってくるナイフ同士の隙間は大きいから、落ち着いてさえいれば特に問題はない。

……まあ、問題があるとしたら私の弾幕が当たらない事か。

如何言う原理か知らないけど、あのメイドが瞬間移動するもんだから中々当たらないのよね。

私も似た様な事は出来るけど、此处まで精度は良くないわよ。

「これも当たらないなんて」

「それはお互い様よ。私としてはさっさとやられて欲しいんだけど」

「そんなのお断りよ」

「私はアンタと遊んでるほど暇じゃないの」

「私も暇じゃないけど、お嬢様の命令なのよ」

「あーそうですか」

「ええそうなのよ。だからコレで遊んでいて。…メイド秘儀『操りドール』」

メイドは三枚目のスペカを宣言した。

今までのカードを考えると、コレもナイフを出現させる手品みたいな奴なんですよ。

流石に同じネタを三回も見ると飽きるわ。

実際の所、メイドが最初にナイフを投げた後、ばら撒く様に別のナイフが出現する。

ばら撒く様に投げたナイフは、壁に跳ね返って来るけどさっきと同じ要領で避ければ大した事はない。

最初のナイフは、真っ直ぐ私を狙って来るけど跳ね返る訳じゃないから大きく避ければ良いだけ。

……正直な話、攻略法さえ分かれば避け続けるのは難しくないわ。

とは言え、このまま避け続けて相手のスペカが尽きるのを待つのも面倒ね。

通常の弾幕じゃまともに当たらないし、此処は手持ちのボムを使って一気に片付けますか。

私は懐から一枚のスペカを取り出し、メイドに狙いを付ける。

メイドは彼方此方移動してるけど、このスペカは幾ら移動しようとも関係ないわ。

「夢符『封魔陣』！」

私がスペカを宣言すると周囲に結界が張られ、その結界範囲が一気に拡大していった。

その過程で周りに飛んでいるナイフは全て弾き落とされる。

メイドは拡大し続けた結界を避けようとしたが、四方に広がる結界の前には無意味だった。

「キャアツ?!」

避ける事の出来なかったメイドは結界に捕まり、そのまま弾き落とされた。

本当は『夢想封印』でも良かったけど、此処の主の事を考えてコッチにしたんだけど……これ火力がイマイチなのよね。

でも、全体に攻撃出来るのが強いから重宝してるんだけど。

「いたた……。ちょっと油断したわ」

「あ、やっぱりまだ起き上がるのね」

「あの程度じゃ私は折れないわよ。それにスペカはまだ余ってるし」

「一体何枚持つて来たのよ」

「後七枚ほどあるわ」

「多いわね」

「当然でしょ？ お嬢様からは貴女の足止めを命じられてるのよ。むしろコレでも心許無い位よ」

「……私の足止めですって」

「ええ。…我が主はもう一人の侵入者との戦いを望んでいるの。その障害となるものを止めるのは従者として当然の事でしょ」

「もう一人の侵入者って……ッ?!」

メイドの話を聞いた私は、急ぎリュウの元に行こうとした。ただ彼女は今までも見せたナイフの手品を使って私の行く手を遮って来た。

「何処に行こうと言うのかしら？ 貴女の相手は私よ」

「悪いけどアンタの相手をしてる暇が無くなったわ。……だから邪魔をするな」

「それは無理な相談ね。…だって、今の私の仕事は貴女の足止めだもの」

「……即行でケリをつけるわ」

「出来るかしら？ 貴女の時間は私の物よ」

「そんなの……知った事じゃないわよ!!」

私は少しだけ本気でメイドを倒す事に決めた。

こんな奴に時間を掛けた所為で、リュウに暴走されたら堪ったもんじゃない。

もしアイツに暴走でもされたら、今の私の手持ちじゃ倒し切れないわよ。

お願いだから絶対に暴走だけはしないでよリュウ。そんな事になったら、面倒な事この上ないのよ!!

第十話 永遠に紅い幼き月

俺は今、紅い屋敷の二階を探索してるんだけど……一向に犯人が見付からない。

まあ、別に見付からないなら見付からないで、特に問題ないんだけどな。

今は手持ちのスペカが心許無いし、この姿だと勝てる気がしないし。さつき屋敷の左側の方から戦闘音が聞こえて来たから、もしかしたら既に霊夢が戦っているのかも。……寧ろそうであって欲しい。

「それにしても、無意味に広い屋敷だよな。これだけ広いと迷いそうだが……って、なんの音だ？」

屋敷の一室を探索していると、直ぐ近くから鐘の音が聞こえて来た。でも、この部屋には鐘なんて置いていない。

それに鐘の音が聞こえて来たのは、この部屋の外の方からだった。

鐘の音がなんとなく気になった俺は、廊下の窓から顔を出し周囲を見回してみる。

すると外には大きな時計台が在り、その傍に羽の様なものが生えた少女の姿があった。

どうやらさつきの鐘は、外の時計台が時刻を知らせる為のものらしい。

その傍に居る少女は……多分この屋敷の住人かな。

今まで見てきた妖精たちとはシルエツトが違うから、此処のメイドって事はないと思うけど。

「無視しちゃ……駄目なんだろうな。きっと」

本当なら無視して霊夢と合流したいけど、外に居る少女はさっきから俺の事を見る。

時計台まではそれなりに距離があるのに、彼女からの視線を物凄く感じる。

こんな事なら鐘の音なんて無視すれば良かった。

そんな事を思いつつ、俺は外に飛び出し時計台へと向かった。

………

……

…

時計台にまで辿り着くと、空を覆っていた紅い霧が一部だけ晴れ、紅い月が姿を現していた。

そしてその月をバックに、背中にコウモリのような翼が生え、フリルの付いた薄紅色のドレスを着た少女が浮んでいた。

翼の生えた種族は知っているけど、コウモリの翼が生えた種族は初めてみたな。

「こんばんは、何処かの誰かさん。私の名はレミリア・スカーレット。この屋敷の主よ」

「こんばんは、レミリア。俺の名前はリュウ。……それで君はこんな所で何をしているんだ？」

「月光浴ついでに人を待っていたの」

「そうなんだ」

「ええ。私はずっと此処で待っていたのに、中々来ないからヤキモキしたわ」

「その人にも色々と都合があつたんだよ」

「そんなの私の知った事じゃないわよ。この夏の寒空の下で一人待っているのは退屈だったわ」

「寒いなら中で待っていれば良かったのに」

「私が外で待っていたい気分だったの」

「あ、あはは……それじゃ俺はこの辺で」

「あら。折角来たのだし、少し遊んで行きなさいよ」

「悪いけどそう言う気分じゃないんだ。ごめんね」

「私は遊びたい気分なの」

そう言う少女は、抑えていた力を解き放った。

屋敷で探索している時には感じなかったけど、彼女が持っている力は相当なものだ。

「（……参ったな。これは逃げれそうに無いぞ）」

「こんなにも月が紅いから、本気で殺しに行くわ」

「……やれやれ。こんなにも月が紅いのに——」

「大変な夜になりそうだ／楽しい夜になりそうね」

こうして俺と少女の戦いの火蓋は切って落とされた。

先に仕掛けて来たのは少女の方。全方位に紅い大弾と青い弾をばら撒き始める。

放たれる紅い弾の大きさと、隙間を埋める様に放たれる青い弾が中々に厄介だな。

早めに弾の軌道を読まないで一気に落とされそうだ。

俺は早めに弾の軌道を読み、掠りながらも彼女の弾幕を避け続けた。

「天罰『スターオブダビデ』」

弾幕を避け続けていると、少女は一枚目のスペカを宣言した。

宣言すると、彼女を周囲全てに紅い光球が出現する。

その光球は動いたりはしないが、彼女が放った力に連鎖して一斉にレーザーを照射し始める。

この程度ならまだ楽だったが、周囲にある基点から無数の青い弾が撃ち出された。

最初のレーザーの所為で逃げ場がかなり制限され、次に放たれる青い弾を避けるスペースが少ない。

僅かに空いたスペースを使い、なんとか弾を避けるけど……心の中心では何時当たるかと冷や冷やしてる。

それでもなんとか避け続け、彼女に俺の弾幕を叩き込む。

こんな弾幕を何時までも避け続けられる訳ないし、早く終わらせるにはこれは一番手っ取り早い。

そんな事していると、突如レミリアの弾幕が止んだ。

「一枚目は攻略されたか。…まあ、その位してくれないと楽しくな

いわ」

「こっちは必至だから楽しむ余裕なんてないんだけど……」

「だったら、貴方の力を解放すれば良いじゃない。そうすれば楽しめるわよ」

「……………」

あの子が何時俺の力を知ったのか分からないけど、出来る事ならそれは避けたい。

でも、パチュリーの話だと彼女は我が侬らしいから、何が何でも俺の力を使わせるだろうな。

彼女ほどの力の持ち主となると、『ジャバジブ』や『ナイト』じゃ力不足だろうし。

使うとしてもアレは論外だから、やっぱり此处は『カイザー』しかないな。

「二枚目。冥符『紅色の冥界』」

彼女の二枚目のスペカは、さっきのレーザーとは違い無数の小さな弾を飛ばしてくる物だった。

ただ、飛ばしてくる弾の数が多く、立て続けに全方位交差弾が飛んでくる。

飛んでくる弾の数は多いものの、一つ一つのサイズが小さいお陰で回避するだけのスペースはある。

落ちていて、弾の軌道に注意していれば避ける事は差ほど難しくない。

弾の軌道を読み切った俺は、今度はさっきの弾幕よりも楽に攻略する事が出来た。

「……二枚目も突破されたか。それなりに頑張るのね」

「あんまり力は解放したくないからね」

「そう言われると、無理矢理にでも解放させたいのが人の性よ」

「……君は人じゃないだろ」

「貴方も人じゃないでしょ？」

確かに俺は人じゃなくて竜だけど、この場合俺は関係あるのか？

……いや、今はそんな事気にしている場合じゃないか。

彼女はまだまだやる気みたいだし、此処は気合を入れて掛からないとな。

「さてっと。三枚目は少し趣向を変えようかしら」

「お好きにどうぞ」

「ええそうさせて貰うわ。…獄符『千本の針の山』」

彼女が宣言した三枚目のスペカは、大量のナイフと小さな弾が同時に飛んでくるものだった。

ナイフは俺狙いで飛んで来るが、一緒に放たれた弾の方は壁やナイフに当たると跳ね返って軌道が読み辛くなる。

只でさえ弾の数が多いのに、小弾が跳ね返ってくるんじゃない何処から弾が来るのか分からなくなる。

ギリギリの所で回避しているけど、こんな調子じゃ何時まで持つか

……ッ?!

「しま……ッ!？」

跳ね返ってくる弾の軌道を読むのに集中していた所為で、ナイフの軌道を読み損ね被弾してしまった。

当たったナイフは、俺の脇腹に深く突き刺さった。

弾幕ごっこで被弾しても死なないって言ってたけど、流石にコレは不味いだろ。

刺さった箇所から血が流れ出てるし。……今このナイフを抜いたら余計に血が出そうだな。

「あらあら。血が出てるけど大丈夫？」

「大量にナイフを投げて来た奴が言う台詞か」

「でも、この位やられないと本気にならないでしょ？ 私は貴方の本気が見たいのよ竜さん？」

「……………」

さっきの趣向を変えるって言うのは、弾幕の難易度を上げるって事か。

一枚目、二枚目みたいな弾幕じゃ俺が本気にならないと判断のか……。

……正直な話し、こんなの使わなくても結構きつかったんだけどな。

「さあ、次で四枚目。その調子じゃ次で終わりかしら？」

余裕綽々と言った感じで、目の前に居る少女は次のスペカを見せびらかす。

実際の所、このままじゃ何も出来ずに終わるのは目に見えている。
この場に霊夢が来てくれれば……なんて事を考えても、現実是非情
なのは重々承知してる。

……だったら使っしかないよな。

手加減出来るのか分からないけど、このままやられる訳には行かない！

「……一つ良いか」

「何かしら？」

「頼むから死んだりしないでくれよ。遊びで殺してしまいましたってのは、流石に洒落にならないから」

「それは要らぬ心配よ。…私は夜の支配者たる吸血鬼。そう簡単に死んだりしない」

「そつか。だったら問題ないな」

俺はそう言っで、ポケットから一枚のカードを取り出す。

このカードはスペカであってスペカじゃないもの。俺が戦いの最中に変身する時に宣言する様のカード。

妖精や低級の妖怪ならまず使う事の無い物だけど……目の前に居る相手なら問題はない。

「……皇帝『カイザー』!!」

俺がカードを宣言すると、俺の周りに赤いオーラが立ち上る。
覚悟しろ吸血鬼。力を解き放った俺は今までの様には行かないぞ!!

レミリアSide

……とうとう彼が本気になった。

今はまだ彼を包む赤いオーラで姿は見えないけど、それでもはつきりと強大な力を感じる。

コレほどまでに強大な力を持つ妖怪は、古くから幻想郷に住む妖怪でも数える程度しか居ない。

……いや、純粹な力だけなら八雲 紫よりも上か？

あの妖怪の賢者よりも上の力……。そんな存在との弾幕ごっこ……
……良いわね。

長い事刺激に飢えて、色々と暇潰しをしていたけれど彼以上の遊び相手は居ないわ。

「さあ！ 早く姿を現しなさいリュウ！ その力、私に魅せてみる
……」

すると、私の声に反応したのか立ち上っていたオーラは弾け、中から変身したリュウが現われた。

さっきまでの人の姿とは違い、上半身の服は無くなり、髪は白く背中には皮膜の無い赤い羽が生えている。

ズボンはそのままだが、尻の辺りからは赤い尾が生え、足は赤いかぎ爪となっていた。

これは人の竜の中間の様な姿と言えば良いのかしら？ …… 少なく

とも？人？とは言え無いわね。

「……………」

「何を呆けている吸血鬼。早く続きを始めるぞ」

「え、ええ。そうね」

なにコイツ。姿が変わっただけじゃなくて、態度まで変わったわ。最初に会った時は気分じゃないとか言っただけに、如何言っ心変わりをしたのよ。

……まあ、いいわ。私も久し振りに本気で遊ばせて貰うから。

「紅符『スカーレットマイスタ』」

私の四枚目は、彼に向かって連続で大弾を放った後、周囲にも大小様々な弾を発射するスペカ。

自分に向かうだけではなく、周囲にも弾幕を張るから中途半端な回避は意味を為さない。

さあ、この弾幕を如何攻略する？

「……………」

私の期待に反し、彼はただその場で佇んでいるだけだった。

私の予想を超える何かを期待してたのに、佇んでいるだけなんて……。

これだけの力を発しておいて、まさかこの程度だと言っのかしら？

「おい。どっちを見てるんだ、俺はこっちだ」

「……えっ？」

彼の声が突然右の方から聞こえ、慌てて確認するのと同時に彼が弾幕を放って来た。

私は慌てて弾幕を回避するが、彼が放って来た弾幕の速度が極端に上がっていた。

変身する前の彼の弾幕は、お世辞にも早いとは言えないもの。

でも、今放って来た弾幕は風を思わせるくらいに速い弾幕だった。

流石に力を解放したくらいで、此処まで弾幕の速度が上がるとは思わなかった。

だけど、彼の弾幕は先程と変わらず真っ直ぐ飛ぶだけのもの。

彼の射線上から移動すれば避けるのは簡単……だけど、本当に注意すべきは彼本人の移動速度だ。

さっきまで右側にいたのに、今度は正面に移動してるのがその証拠。私も周囲に弾幕を張っているけれど、彼が速過ぎて弾が掠りもしない。

集中していれば目で追えるけど、私の弾幕が遅くて話に為らない。このスペカじゃ、どんなに頑張っても弾幕を張ったとしても彼を撃ち落とすのはまず不可能。

そう考えた私は、今のスペカを撃ち止める事にした。

「……なんだ、もうこのスペカは終わりか」

「当たらない弾幕を使っても意味はないわ。だから今度は攻め方を変える」

「そうか」

「行くわよ。神槍『スピア・ザ・グングニル』」

私が宣言した五枚目のスペカは、速さだけならさっきのよりも上。ただ巨大な槍の形をした弾幕を相手に向かって投げるのもの。

弾を彼方此方にばら撒くのは違い、真っ直ぐ相手に向かって行く弾幕。

今の彼みたいに素早く動き回られると当て難いんだけど、その動きを読み切れば当てられる。

私は牽制用の弾幕を張り、彼に弾を避けさせる。

彼は私の狙い通りに弾を避け、グングニルの射線に入る。

私は彼が射線に入った瞬間、手に持っていた槍を全力で投げ付けた。投げた槍は真っ直ぐ突き進み、彼に命中する……かと思ったら――

「大爆発『ドギガ』」

――彼は、手元に残していたスペカを宣言した。

彼がスペカを宣言すると、私達の間で突如大爆発が発生する。

その爆発に巻き込まれ、私はグングニルごと吹き飛ばされてしまった。

私は爆発の熱に焼かれながらも、なんとか体勢を立て直した。

そして周囲を確認すると、先程の爆発の被害を受けたのか時計台の一部が破損している。

……でも、破損したのが一部で運が良かった。

アレを時計台の中心で受けてたら、屋敷にまで被害が出ていたに違いない。

「やれやれ。グングニルが不発に終わるなんてね。こんな事ならも

っと早くに投げれば良かった」

「どのタイミングで投げようと、ドギガで吹き飛ばすだけだ」

「まあ、そうでしょうけどね」

手元にスペカが残っていたのは予想外だったわね。

アレが無ければグングニルで射抜く事が出来たかも知れないのに……。

まあ、既に過ぎた事を反省をしても仕方が無いわ。それより次のスペカは如何しましょう。

彼の速さを考えると、弾幕が厚いタイプのスペカが良いでしょうね。そうになると、アレを使うのが手っ取り早いかしら。

どの道残りのカードも少ないし、コレでラストにしましょう。

「ラストスペル『紅色の幻想郷』」

私が宣言したラストスペル。

このスペカは周囲に大弾を発射した後、その軌道に沿って無数の弾を出現させ四方にばら撒く物。

放たれる大弾の数が多ければ多いほど、出現する弾の数も増える。幾ら移動速度が速い彼でも、四方を弾幕に囲まれて身動きが取れない筈。

「……………」

私の目論見通り、彼の周囲は無数の弾で回避スペースが狭まっている。

今も周辺に散った弾が、彼に降り注いでいる。

回避スペースも極僅かしか残っていない。このまま行けば避け切れずに被弾する筈。

悪いわねリュウ。この勝負貰ったわ！

「……そう言えば、お前は俺の力がみたいんだったな。今からその一端を見せてやるよ」

「……？　今更何を言っているの。力なら既に解放してるじゃない」

既に四方を私の弾幕で囲まれているにも関わらず、彼には危機感が無いのだろうか？

そんな事を思いつつ弾幕を張っていると――、

「ラストスペル『カイザーブレス』」

――今度は彼がラストスペルを宣言した。

お互いに最後のスペカである以上、彼の弾幕に被弾したら私の負けになる。

それに先に私が宣言しているから、私の弾幕はこれで掻き消されてしまう。

……でも、彼のラストスペルを攻略出来れば私の勝ち。

私に逃げの選択はない。なら、必ず攻略してみせる！

「行くぞ、レミリア・スカーレット」

そう言うと、彼のスペカが消失し、魔法陣の様なものが描かれた黒い球体が現われ彼を包む込んだ。

そして、球体に描かれた魔法陣が光り輝いたと思ったら、球体が崩壊し始め、何かが飛び出して行った。

はつきりと姿を確認出来た訳じゃないけど、琥珀色の巨大な生物が

空に飛んで行くのが見えた。

「……………？ 何も来ない？」

球体が崩壊し、何かが空に飛んでいったにも関わらず、彼の弾幕は未だに張られていない。

それどころか、球体の中に居ると思っていた彼の姿が何処にもない。ラストスperlである以上、嘘を吐いて逃げ出したとは考え難い。

流石にそんな腰抜けではないだろうし、逃げるのならもっと早くに逃げている筈。

私は幾つかの疑問を抱えながら、何時なにが来ても良い様に周囲を警戒していた。

すると、突然私の頭上が明るくなり始めた。

突然の光に驚きつつも、空が明るくなつた事に疑問を持った。

今の時刻は深夜零時過ぎで、日の出にはまだ時間がある。

だと言うのに、昼間と同じかそれ以上の光が降り注ぐのは幾らなんでも可笑しい。

それに光に当たっているのに、身体が気化しないのも不自然過ぎる。

私は、この光の正体を知る為に空を見上げると――、

「なッ……………?!」

――私の頭上には、幾つもの光の柱の様な物が降り注いでいた。

私は慌ててソレを避けようとしたが、光の柱が降り注ぐ方が早く…

…そのまま光に飲み込まれた。

レミリアSide out

第十一話 霧の夏の終わり（前書き）

今回は霊夢視点です。

第十一話 霧の夏の終わり

紅い屋敷の二階。其処で私は、銀髪のメイドと弾幕ごっこで戦っている。

メイドの弾幕の所為で、廊下は銀のナイフだらけになっているけど……この程度なら如何と言う事はないわね。

「霊符『夢想封印』!」

「キャアアツ!」

私の周りに出現した七色の光玉は、手品を使つて瞬間移動するメイドに命中し見事撃ち落とした。

二枚目のスペカを使う事に為ったのは予想外だけど、まだ予備もあるしなんとかなるでしょ。

「悪いけど、負けてやる訳にいかないのよ」

「くっ。申し訳有りませんお嬢様……」

それにしてもメイドの足止めの所為で、思ったよりも時間を食ったわ。

屋敷の外では戦闘音が聞こえてるから、多分リュウが戦っているんでしょうね。

途轍もない力も感じたし、あの馬鹿が力を解放したに違いない。

……本当に暴走を始めていたら、此処の主にどう責任を取らせようかしら。

いや、それよりも私がアイツを討伐する方が先か。

「……？ 外が明るくなつて来た？」

アレコレ考え事をしていると、突然窓の外が明るくなり始めた。まだ夜だと言うのに明るくなるのは不自然と思い、窓の外を覗いて見ると――、

「なにあれ……」

――時計台付近に、大量の光の柱が降り注いでいた。

一つ一つに込められている力も凄いけど、アレだけの量を一度に放つ存在が居るのにも驚いた。

なんであんな物が降り注いでいるのか知らないけど、あの光から感じる力はリュウと同じ物。

つまり、あの光はリュウが放った物と言う事になるわね。

「あの馬鹿。幻想郷を崩壊させる気？」

アイツがそんな事しないのは分かってるけど、あの力を見るとそう思えてしまう。

前に紫が警戒していたのも、リュウが力を使いたがらないのも納得だわ。

常にあの力で戦われたら幻想郷が持ちそうに無いもの。

「お嬢様?!」

「…今度は何事よ」

光の柱が降り注ぐのを見ていたメイドが、驚いた様な声を挙げると忽然と姿を消した。

多分、さっきまで使っていた手品を使って移動したんでしょ。

それにしても、唐突に姿を消したけど一体何があったのかしら？

………そう言えば、今リュウと戦っているのは此処の主だったわね。

あの光を見て、自分の主が無事なのか心配になったってところかしら。

「まあ、あの力を見れば誰だって不安になるか」

メイドの行動は一先ず置いておくとして、私もあの場所に向かうとしますか。

……出来る事なら無事であって欲しいけど、万が一の場合は本気で行くしかないわね。

私は手持ちのスペカに不安を感じつつ、光が降り注いだ時計台の辺りまで行く事にした。

………

………

…

私が時計台に行くと、地面は大きく抉れ幾つものクレーターが出来ていた。

そのクレーターの一つには、さっきのメイドとコウモリの翼を持った子供が居る。

子供の方は服がボロボロになっているから、アイツと戦っていた屋敷の主はあの子ね。

屋敷の主の姿は見つけたけど、肝心のリュウの姿が見当たらない。クレーターの中には居ないし、戦っていたと思われる空中にもその姿はない。

一体何処に行ったのかと辺りを見回していると、空から強大な力を持った何かの気配を感じた。

何が居るのか気になり空を見上げると、上空から腕に空色に光る四対の羽を持つ琥珀色の鱗の巨大な竜が降りて来た。

紅い月を背景に空に浮ぶ竜の姿……。これは私が見た夢と全く同じ風景だった。

あの夢が予知夢だった事に驚きを感じつつも、この光景に心奪われる。

人にも妖怪にも興味は無かったけど、あの竜だけは目を離すことが出来なかった。

《……吸血鬼。この勝負、俺の勝ちで良いのか？》

「「ッ?!」」

空から私達の事を見ていた竜は、突然下に居る吸血鬼に話しかけた。どうやらさっきの光線を放ったのはこの竜らしく、勝負の勝ち負けをはっきりさせたいみたい。

……でも、あの竜の声が物凄く聞き覚えのある声なのよね。

いや、今の状況から考えれば、あの竜の正体なんて察しが付くんだけど……。

「……ええ。コレ以上戦う気は無いわ」

《そうか》

竜は一言そう言うと、その巨体が一瞬にして消滅し……代わりに青い髪^{リュウ}の少年が姿を表した。

この状況をちよつと考えれば、あの竜がアイツだって事は直ぐに解るんだけど……なんか納得が行かない。

人の時のアイツを知っているからか、あの姿のリュウに魅せられた自分が無性に腹が立つ。

「あゝ。暴走せずに終わって本当に良かった」

「ほんとにね。お陰でコッチは無駄な心配しちやっただじゃないの」

「えっ？ 霊夢、俺の心配してくれたのか？」

「アンタの心配じゃなくて、アンタが暴走した時の処理を如何しよつか心配したのよ」

「処理って……。せめて封印にしてくれ」

「どっちでも同じよ」

「酷い……」

確かに言葉は悪いかも知れないけど、あんな力を持つてる奴を封印だけでなんとか為る訳ないじゃない。

第一、リュウが暴走した時は私が止めるって約束でしょ。

多少言葉が悪くても気にするんじゃない……って――、

「あんた、お腹から血流してるじゃない?！」

「あ、これ。さっきの戦いで被弾した時にナイフが刺さって。その

時の傷だよ」

「いや、そんなに暢気に言える傷じゃないから。……それ大丈夫なの？」

「ん〜……こうしてるのも結構辛いかな？」

「だったら早く治しなさいよ！ その位出来るでしょ！！」

「分かってるって」

そう言うとりゅうは、空の上で傷の治療を始めた。

治療に関しては何も出来る事はないし、私は下に居る吸血鬼に話でもしましょう。

そう考えた私は、クレーターから出た吸血鬼とメイドの下へと向かう。

私が傍に近付くと、メイドがナイフを取り出そうとするが、吸血鬼がそれを止めた。

メイドは納得が行かない様だが、吸血鬼の睨み一つでナイフを仕舞いこんだ。

見た目は完全に子供なのに、睨みだけで黙らせるとかやるわね。

「……それで何か用かしら巫女さん」

「言わなくても分かっていると思うけど、この霧を今夜中になんとかしなさい」

「あら？ 私に勝ったのは彼であって、貴女の言う事を聞く必要は無いわよ」

「アイツは私の神社の居候で、今回は来たのは霧を晴らす為なの。だから目的は一緒よ」

「そうなの。……だったら仕方が無いわね」

「手早くやりなさいよ」

私はそれだけを言うと、空で待っているリュウの元に行く。

傍によると、リュウの怪我はすっかり塞がっていて、服に血を流していた痕跡がある位だ。

如何やって傷を治したのかは知らないけど、あの短時間で治せるのは凄いわね。

……これを利用して神社に人を呼べないかな？

「……霊夢、今へんな事考えて無いかな？」

「気のせいよ」

相変わらず妙なところで勘が良いわね。

まあ、コイツを利用して神社の信仰獲得しても有り難味も薄いだろうし、気長に別の方法を考えましよう。

それに神社と言っても、博麗神社くらいしかないんだし、変に焦る必要も無いわね。

「それじゃ帰るわよ、リュウ」

「おっつ」

私はリュウを連れて吸血鬼の屋敷を後にした。

……

……

…

神社への帰り道。隣りで飛んでいるリュウの機嫌が妙に良いのが気になる。

あのやり取りの間に何かあった訳でもないし、コイツの機嫌が良くなる様な事は無かった筈。

……だとしたら、なんでコイツはこんなにも機嫌が良いんだろ？

「リュウ。妙に機嫌が良いけど如何したのよ」

「いや、霊夢が俺の心配してくれたのが嬉しくて」

「はあ？ 何時私がアンタの心配したのよ」

「俺の怪我を知った時」

……あゝ、あの時か。

アレは見ていて痛々しいから言っただけなんだけど……。

「他人なんて如何でも良いと思っていた霊夢が、ちゃんと人の心配が出来るのが嬉しくて」

「……アンタ、そんなにご飯抜きにされたいの？」

「なんで?!」

全く、コイツは私の事をなんだと思っているのよ。

確かに他人に興味は無いけど、優しさの欠片も無いみたいな言い方は止めなさいよ。

私にだって優しさの一つや二つ………あるわよね？

あまりにも周りの事を気にしないでいたから、自分が優しいのなんて気にした事も無かったわ。

「……まあ、別に良いか」

「えっ?! 本当に飯抜きなの!?!」

「そつちの話じゃないわよ」

妙なところで勘が良い癖に、変な思い違いをするわね。

さっきの優しいとかもそうだけど、誰も本気で食事抜きにするとは言っていないでしょ。

本当に変わった奴よね、リュウって。……でも、悪い奴じゃないか。

「飯抜きは辛いので勘弁して下さい!!」

「ふふつ。そんなの分かってるよ」

コイツの慌てる様が可笑しかったのか、自然と笑みが零れた。

私はリュウにそう笑い掛けながら、コイツの隣りを飛んで我が家へと帰るのだった。

第十一話 霧の夏の終わり（後書き）

どうも、作者のベヘモスです。

こうして後書きを書くのも久し振りですが、今回の紅魔郷編は如何だったでしょうか？

多少急ぎ足で書きましたし、色々と言いたい事があるかと思っていますが…… コレが自分の実力なんです。申し訳ないです。

予想以上に弾幕ごっこを文章で表現するのがめんど……じゃなくて、大変で結構疲れました。

一応エクストラも書きますが、ちょっと息抜きを兼ねて日常話を書こうかと思ってます。

この小説をどれだけの方が楽しみしてるか解りませんが、日常話は基本ネタです。

だから過度な期待はしないで下さい。どんな話になるかは、書き始めないと分からない事が多いので。

まあ、息抜きで書くのでギャグっぽいものが多そうですね。

では、次回の更新をお楽しみに。

第十二話 道具収集（前書き）

今回からリユウ視点です。

……一体何話までリユウの視点で書けるかな？

第十二話 道具収集

吸血鬼『レミリア・スカーレット』が起した紅霧異変を解決してから一週間が経った。

紅い霧が晴れた空には太陽が戻り、幻想郷は何時もの暑い夏が戻って来た。

この一週間の間に特別事件もなく、俺達は平和な毎日を送っている。…… もっとも霊夢は、この暑さにやられてダウンしているけど。

本人は夏ばてだと言っているけど、普段と大差無いから本当に夏ばてなのか良く解らない。

前に魔理沙が霊夢の事を辛辣に言っていたの理由がよく解る。

あの状態の霊夢を見ると、働かない巫女と言われても仕方が無いな。

まあ、霊夢に関しては何時もの事だから置いておくとして。

俺は今、博麗神社と人里を結ぶ道の整備をしている。

普段から人の来ない神社だけど、流石に何時までも獣道のままにしておく訳にもいかない。

それに、この道をきちんと整備すれば参拝客も増えるかも知れないし。

……と言つのが建前で、本当は俺が歩きにくいからと言つのが最大の理由だったりする。

霊夢は人里に向かう時は空を飛んで行くけど、俺は徒歩で行く事が多い。

確かに空を飛んでいけば楽だけど、人の時の姿は出来るだけ歩きで移動したいからだ。

別に飛ぶのが嫌いって訳じゃないけど、のんびり歩くのも悪くない

し。

そう言った理由から、今は獣道をちゃんとした道と認識出来る様にしている。

まあ、やっている事と言えば、邪魔に為りそうな木や草を刈るだけなんだけどね。

木の方は流石に幹自体を切る事は出来ないから、邪魔になる枝を折っているだけ。

だから、今は重点的に草を刈り取っている所だ。

「とは言え、流石に中々終わらないな……」

朝早くから始めた作業だけど、昼が過ぎたのにまだ半分にも終わっていない。

……いや、昼までで半分終わらせた事を褒めるべきか？でも草刈りが終わった後も作業は残ってる上に、神社の仕事もほった置く訳にもいかない。

そう考えるともっと効率よく作業がしたいものだ。

「まあ、道を作るのは魔法使ってから良いんだけどな」

土属性の『破土^{ハート}』を使えば道らしいものは出来るだろう。

後はそれを整備すればいいんだし、この作業さえ終われば多少楽が出来る筈だ。

……いつその事、魔法で草を地面に埋めるか？ いや、また生えそうだから止めよう。

それに今は人里へのルート開拓だし、そう言うのは後でも良いか。

「……ん？ 何か落ちてる？」

道の草刈りをしていると、直ぐ傍の木の根元に一振りの剣が落ちていた。

なんでこんな所に剣が落ちているんだ？ 誰かの落し物か？

……でも最近は神社に人も来てないし、妖怪が出るって言う道で武器を落とすのも考え難いか。

傍に人骨の一つでも有れば、此処で亡くなった人の遺留品って事になるけど……それも無いな。

「じゃあ、本当になんなんだ？」

剣の形としては、仲間の一人が使っていた『太刀』に近いかな。

俺には彼の戦い方が真似出来なかったから、旅をしている時は装備する事は無かったけ。

……でも、剣の基本的な型は一緒なんだし、今なら装備できるかな。流石に抜刀すると同時に斬るのは練習が必要だけど、普通に使う分には問題ないか。

「……何処の誰の物かは存じませんが、有り難く頂戴します」

念のため、一度手を合わせてから落ちている剣を頂戴した。

俺は刀身の状態を確認する為、一度剣を鞘から抜いてみる事に。

鞘から抜くと、其処にはサビ一つない完璧な状態の刀身が姿を現し、太陽の光に反射して銀色に輝いていた。

旅をしてる中で色々な剣を見てきたけど、これ程の剣を見たのは久々だな。

……でも、『ドラゴンブレード』や『グミ王の剣』程じゃないか。寧ろ、あれ程の剣がそこら辺に転がっているほうが異常だな。

「まあ、この剣も十分に使えそうだし良しとするか」

俺は剣を鞘に仕舞い、再び草刈りを再開する事にした。

……

……

…

剣を拾ってから二時間ほどが経った。

時折、変な物を発見する以外は何の問題も無く作業をしていたんだけど、此处に来て問題が発生した。

「……すっかり囲まれたな」

俺は今、この山の周辺に住んでいると思われる妖怪たちに囲まれてしまった。

敵の数は大体……十人かそこ等って所か。

別に妖怪に囲まれたこと事体は大した問題じゃないけど、このままだと道の開通の妨げになる。

仮に開通出来たとしても、妖怪に襲われる可能性のある道なんて誰も通りたがらないな。

俺が通る分には問題ないけど、人里と神社の交流の為に整備してるんだし、コイツ等をなんとかしないと不味いか。

「仕方が無い。いっぺんコイツ等を締めるか」

そう呟くと、取り囲んでいた妖怪達が一斉に襲いかかって来た。
俺は奴等の攻撃が届くよりも早く剣を抜き――、

「乱武『せん切り』」

――周囲を取り囲んでいる妖怪たちに、無数の斬撃を叩き込んだ。
叩き込んだといっても、この技自体は強くないし、ちゃんと手加減したから死んだ妖怪はいない。

全員生きている事を確認したら、軽く竜の力を解放した。

俺の力を理解した妖怪たちは、顔を青ざめたり、冷や汗を流している。

「……命が惜しいなら今すぐ失せろ」

力を解放しつつそう言うのと、取り囲んでいた妖怪たちは蜘蛛の子を散らす様に一斉に逃げ出した。

この場に居た全員逃げたことを確認し、俺は力を再び封印し、握っていた剣を鞘に仕舞った。

今回は威嚇の為に使ったとは言え、本当はこう言う事はしたくないんだよな。

此処の妖怪たちを従えて勢力を作る気も無いし、やり過ぎて幻想郷のパワーバランスを崩すような真似もしたくない。

それにこんな事の為に力を解放するのも癪だしな。今後はこの剣一つで追い払う事にするか。

……でもそれだと、道の問題解決には為らないんだよな。

「やれやれ。本当に如何するかな？」

如何すれば良いのか分からず、溜息を一つ吐くと……近くの茂みが

少しだけ動いた。

俺はさっきの妖怪の誰かが戻って来たと思い、鞘から剣を抜き……
一気に茂みを切り裂いた。

「うわぁッ?! ……い、いきなり何をするんだ! 危ないじゃないか!」

「……人?」

茂みの中に居たのはさっきの妖怪ではなく、銀髪にメガネを付け、青を基調にした服を着た男性だった。

………

……

…

「本当にすいませんでした」

「いや、もう良いから」

剣を仕舞った俺は、間違って切り掛かってしまった人に頭を下げ謝罪していた。

男性はこう言っているけど、? 妖怪と間違えて斬り殺した? じゃ笑い話にもならない。

こんなのそこら辺の三流新聞にも使われないうて。

「…それで、君はこんな所で一体何をしているんだ？」

「えっと、俺は博麗神社と人里の間に在る道の整備をしています」

「神社と里を？」

「はい。俺、あの神社に居候してまして。少しでも道が良くなれば買出しが楽になるかな〜って」

「それじゃ、君が前に霊夢の言っていた居候か」

「……霊夢の知り合いの方ですか？」

あ、危なッ！ もう少しで霊夢の知り合いを斬り捨てるところだったー！

もし斬り捨てていたら……飯抜きどころか、神社から追い出される可能性もあったな。

本当に茂みだけを切れて良かった。後一步踏み込んでいたら、確実に首を刎ねてたぞ。

「重ね重ね本当にすいませんでした。だから、この事は霊夢には黙っていて下さい」

「あ、嗚呼。それは構わないよ」

「（おっしゃッ！）」

「その代わり、僕の頼みを聞いてくれるかい？」

「……頼みですか？」

「大丈夫。別に難しい事じゃないし、道の整備の片手間で出来る事だよ」

「はあ……」

道の整備の片手間で出来る事って、一体何をさせる気だろう？

整備でやる事なんて言ったら、草を刈ったり歩き易い様に土を弄る程度なんだけど……。

その片手間で一体何が出来るって言うんだ？

「それで、俺にして欲しい事と言うのは？」

「実は僕、魔法の森入り口で古道具屋を営んでいてね。店に出す商品の集めるのを手伝って欲しいんだ」

「商品の仕入れって事ですか？ ……そう言うのはやった事がないんですけど」

「いや、そう言うことはしないよ。ただ、この辺りに落ちている物を持って来て欲しいだけだよ」

「……はい？」

イマイチ理解出来ない俺は、詳しい事を聞くことに為った。

この人が言うには、博麗神社は幻想郷と外の世界の境に位置するらしい。

二つの世界の境の為か、神社の周辺にはよく外の世界からの道具が流れ着くとか。

それでこの人は、そう言った道具を集めて店で売っているみたいだ。
……要するに、道の整備の途中で見つけた道具を自分の店に持って来て欲しいんだと。

「勿論お礼もするけど……如何かな？」

「その位でしたら良いですよ。寧ろ、道具が落ちていて邪魔だと思つてた位ですし」

「なら交渉成立だね。……僕は森近 霖之助。君の名前は？」

「俺はリュウ。ただのリュウです」

「？龍？？ 随分と立派な名前なんだね」

「そんな大した名前じゃないですよ。なんせ、霊夢が適当に付けた名前ですから」

「……あの子は何を考えているんだ」

「あ、あはは……」

多分、何も考えてなかつと思いますよ。

なにせ名付けた理由が？俺の存在が竜だから？って理由ですし。

……いや、ある意味霊夢らしい名付け方なのか。

その後、簡単に打ち合わせをした俺達は、そろそろ日が暮れて来たと言う事もあって、今日は此处までにする事にした。

「それじゃリュウ。出来るだけ定期的に頼むよ」

「頑張ります」

森近さんと別れた俺は、帰り道に落ちている道具を拾いつつ博麗神社に帰る事にした。

……旅してた時の癖で落ちている物を大量に神社に拾ってしまい、その所為で霊夢にこっ酷く怒られたのは、また別のお話。

第十三話 妖怪退治・前編（前書き）

お陰様で、この小説の総アクセス数が一万を突破しました！

これも偏に読んで下さった皆さんのお陰です。有り難う御座います

！！

……えっ？　なんで一万アクセスで喜んでるのかって？

それは、この小説の目標が【最終回までに十万アクセス突破】だからです。

第十三話 妖怪退治・前編

今日も元気に山道製作中のリュウです。

それと同時に茂みに落ちている道具も拾ってます。

……そしてふと考え込むと、俺は一体何をしているのかと考え込んでしまう。

いや、自分で言い出した事なんだし、最後まで責任持たないとな。

「でも、考え込んでしまうのも仕方が無いよな」

草刈りの方は終わったって、今度は道の制作に入ったんだけど……予想以上にめんどい。

当初の予定通り、魔法を使って地面を弄っているんだけど周りの木が物凄く邪魔。

根っこごと土を掘り返そうかと考えたけど、それをすると今度は掘り返した木を如何するかが問題に。

木の一本や二本程度なら燃やせば良いけど、此処は山の中で周りには木が沢山生えている。

そんな中で火を使おうものなら、山火事は確定だって。

こう言った事情から、木の根を掘り返さない様に魔法を使うハメになった。

この作業が中々に大変で、正直なところ草刈りよりも大変なんだよ。手加減して魔法を使わないといけないから、作業効率が中々上がらない。

……ほんと、俺は一体何をしているのやら。

こんな事ならずっと獣道のままで良かった気がする。

「……はあ」

「こんな山の中で溜息を吐いて如何した？」

「ふえ？」

誰も居ないと思って油断をしたいから、掛けられて声に変な返事をしてしまった。

変なところを見せてしまったと思いつつ、突如現われた人物と向き合うことに。

其処に居たのは、青を基調にしたワンピース風の服を着た、青白い長髪の女性だった。

「それで、こんな所で如何したんだ？」

「いえ、ちょっとだけ自分のしている事を見つめ直してしまして……」

「……詳しい事情は聞かないが、自分のしている事の正しさを信じられなければ、何も出来ない思うぞ」

「（正しいとかそう言うレベルじゃないと思うけどな……）」

「まあ、それは兎も角。この山は妖怪が出るから襲われない内に帰った方が良い」

「そう言う貴女はどちらに？」

「わたしはちょっと神社に用があるんだ」

「博麗神社に？」

珍しい……と言つか、俺が居候してから初めての参拝客じゃないか？でも、魔理沙や日傘を差していた女性の例もあるし、この人も参拝客じゃない可能性もあるな。

まあ、どちらにせよ、博麗神社久々の客って訳だ。

「でしたら俺も一緒に行きますよ。妖怪に襲われるかもしれないし」

「いや、それには及ばない。わたし一人でも大丈夫だ」

「そうだとしても、俺はあの神社に居候してるので道は一緒なんですよ」

「あの神社に居候って……よく無事だな」

「……その言い方はなんですか」

「あまり良い噂は聞かないと言う事だ」

……一応、参拝客が来やすい様に道を整備してるけど、この人の言い方だと道があっても来るか分からないな。
色々と頑張っているのにこれじゃ空しくなる一方だな……。

「……はあ」

「と、とりあえず、妖怪に襲われる前に向っとしよう」

「……そうですね」

空しさでテンションが下がっているのを自覚しつつ、俺はこの人と共に博麗神社へ向かう。

どうやら急ぎの用事らしく、神社へは空を飛んで行く事になった。

……この世界の住人って皆空を飛べるのかな？　だとしたら、道を作る必要って何処にあるんだろ。

そんな事を考えると、さっきよりも空しくなってきた。……とりあえず、深く考えないようにしよう。

………

……

…

空を飛んで、最短距離で神社へと辿り着いた俺達。

境内には霊夢の姿はなく、神社は物音せず静まり返っていた。

まあ、この時間なら縁側でお茶を飲んでいるか、昼寝しているかのどっちだろう。

案の定、俺達が母屋の縁側に行くと、座布団を枕にして眠っている霊夢の姿があった。

「……一つ聞きたいのだが、博麗の巫女は何時もこんなのか？」

「大体こんな感じですね」

俺が来る以前の生活は知らないけど、少なくとも俺が来てからの霊夢はこんな感じだ。

まあ、霊夢は霊夢で神殿周りの掃除をしてるんだけど、それも直ぐ

に終わるから後はだらけている事が多いな。……あ、他にも炊事洗濯と言った事もやってるか。

「まったく。当代の巫女がこんなにもだらしないとは思わなかったぞ」

「あ、あははは……」

何か言つて否定すれば良いのかも知れないけど、だらしないのは事実だからな。

なんて言えば良いのか言葉が見つからないよ。

まあ、それは兎も角として、今は霊夢を起こすとするか。

「おい、霊夢。起きろ」

「……ZZZZZ」

「……駄目だ、起きる気配すらない」

「退いてくれ、わたしが起こす」

そう言われたので、彼女に代わって貰うと……徐に霊夢の肩を掴んで身体を起こした。

すると、彼女は仰け反るように首を逸らしたと思ったら……そのまま強烈な頭突きを霊夢の額に叩き込んだ。

額同士がぶつかった時の音が？ゴソツ？じゃなくて、？ガンツ！？って感じだな。

……なんて言うか、骨と骨がぶつかった音じゃない気がする。

「いっつったあゝッ！？！？！ 誰よ！ いきなり頭突きなんて叩

き込んだのは?!」

「漸く起きたか」

「……ちよつとリュウ。誰よコイツ」

「え〜つと……」

「わたしの名は上白沢 慧音。今日は、博麗の巫女殿に妖怪退治の依頼で参った」

「依頼ねえ」

彼女こと上白沢さんが持つて来た依頼と言うのはこう言うものだ。つい先日、人里の子供達が近くの川辺で変な人形を発見したとか。その人形は土や木ではない素材で出来ており、とても変な形をしていたそうだ。

妖怪かと思った子供達は大人に知らせ、その人形を調べようとしたらしい。

調べる為に人形に触れた直後、突如人形は動き出し暴れ始めたとか。この騒動で、幸いにも死者は出てないが、調査に向った数人が怪我をしたみたいだ。

「アレがなんなのかは解らないが、このままでは被害が出る一方。そうなる前に退治して貰いたい」

「……妖怪退治じゃなくて人形退治とは、また変な依頼ね」

「それは解っているが、里の者ではアレを退治する事は出来ない。だから頼む、博麗の巫女殿」

「報酬は？」

「里で取れた野菜と、米俵一俵で如何だ？」

「まあそんな所か。……それでソイツは今何処に居るの」

「里の者の話では、一頻り暴れた後『無名の丘』方面に逃げたとか」

「了解。それじゃちやつちやと終わらせますか」

「霊夢、俺も手伝おうか？」

「必要ないわ。それよりも、アンタはあのガラクタを霖之助さんの店に売りに行きなさいよ」

上白沢さんからそれだけを聞いた霊夢は、立ち上がり自室に向かう。拾ってきた物に関しては置いておくとして、本当に霊夢の手伝いをしなくても良いのだろうか？

異変を解決したり、こう言う依頼が来るんだから実力があるのは確かだ。

……でも霊夢は人間だ。脆くて危うい人間なんだ。

そんな風に考えてしまうのは、俺が竜と言う存在だからだろうか？

「それじゃちょっと行って来るから、さっさと売りに行きなさいよ」

「……ああ」

「それじゃあね」

それだけ言つと霊夢は何時もの様に飛んでいった。

『無名の丘』と言つのが何処なのか知らないけど、恐らくそつち方面に向かつたんだろう。

あんまり良い予感はないけど、霊夢の実力ならきつと大丈夫だな。

「……………」

「君は随分と心配性なのだな」

「……………そうでしょうか？」

「嗚呼。この幻想郷では確かに妖怪は人を襲うが、博麗の巫女を襲う妖怪など居やしない」

「……………」

「それに怠け者とは言え当代の巫女。ならば、その実力は確かなのだろう」

「そう…ですね」

確かに上白沢さんの言つ通り霊夢は強い。

どんな相手でも物怖じしない彼女なら、たかが人形に負けたりしない筈だ。

しない筈……だけど、それでも不安が拭い切れないのは、俺が心配性だからだなんだろうか？

第十三話 妖怪退治・前編（後書き）

長くなったので二つに分けてみました。

第十三話 妖怪退治・後編

霊夢 Side

上白沢とか言う人の依頼を受けて『無名の丘』にまで来たけど、相変わらず何も無い丘ね。

まあ、春になれば鈴蘭が咲き誇るけど今は夏の終わり頃。

鈴蘭の見ごろはとづくに過ぎてるし、そろそろ季節も変わるから余計にね。

「まあ、そんな事は兎も角。例の人形は何処に居るのやら」

今の時期のこの丘は、ただの広い草原だから直ぐ見付かると思ったんだけど……居ないわね。

彼女が嘘を付く理由もないし、こっち方面に逃げたんでしようけど何処に行ったのやら。

私は空から『無名の丘』に落ちている物を探し始める。

丘には時折風が吹き抜ける程度で、コレと言って目ぼしい物はない。此処で見つけられないと少々面倒になりそうと思っていると、何処から戦闘音が聞こえて来た。

私は音が聞こえる場所を捜していると、今の地点から南の方に煙が上がっているのを発見する。

他に手掛かりもないから、念のため様子を見に行く事にした。

……

……
…

煙が上がっている場所に辿り着くと、其処では腹話術で使う人形とはにわ……土偶？

兎に角、変な形の人形が戦っている光景を見つけた。

戦っていると言っても、変な形の人形が周りなどお構い無しに暴れているだけなんだけど。

「土でも木でもない材質の人形。多分、人里で暴れた人形つてのはアレの事ね」

もう一方の人形は知らないけど、あの暴れているのはなんとかしな
いと。

このまま暴れさせてたら、人間だけじゃなく妖怪にも被害が出そう
だし。

……いや、アイツ等なら多少被害が出てても問題ないか。

「ちょっと其処の暴走人形。コレ以上暴れるなら只じゃおか
ないわよ」

「わ、私の事ですか?!」

「……アンタじゃない。アンタじゃ」

最後勧告として声を掛けたが、反応したのはもう一方の人形だった。
例の人形は私の声など届いていないのか、今も暴れ続けている。
元から交渉する気は無かいけど、此処まで無視されると腹が立つわ
ね。

多少の苛立ちを感じつつ、私は持って来た針と札を飛ばし、暴走し

ている人形に叩き込んだ。

私の弾幕は確かに命中したけど、人形に大したダメージは無く、未だに暴れ続けている。

「まさか、効いてない？」

あの人形が何で出来ているのか知らないけど、針は突き刺さっても居ないし、札も風で吹き飛んでいった。

ただの妖怪だと思っていたけど、どうやら私の見当違いだったみたい。

アレはそこら辺に居る妖怪ではなく本物の人形。だから、弾幕ごっこのルールも適用されない。

なら今回は、相手を懲らしめるのではなく完全に駆除するだけね。

「……全く、こんな事ならもっと装備を整えれば良かった」

愚痴を言いつつも、私は持って来たスペカの一枚を取り出す。

そのスペカを発動させようとしたが、暴走人形は腕と思われる部分を私の方に向けて来た。

アイツの腕はどうも砲身の様な形になっていて、銃口から私に向かって何かを発射して来る。

咄嗟の判断で回避する事が出来たけど、人間の私があんなの喰らったら即お陀仏ね。

何処の誰が作ったのか知らないけど、面倒なものを作ってくれたわ。

「宝符『陰陽宝玉』！」

私はあの暴走人形に近付き、陰陽が描かれた宝玉を叩き込んだ。

宝玉を叩き込まれ奥へ吹き飛ばされた人形だが、顔の部分が少し凹んだ位でまだ立ち上がって来た。

『陰陽宝玉』であの程度なると、『封魔陣』も期待出来ないわね。此処はやっぱり『夢想封印』しかないけど……発動するタイミングあるかしら？

私はスペルを取り出し攻撃を仕掛けようとすると、アイツはそれよりも早く射撃して来る。

アイツの弾は単発だけど、その速度が滅茶苦茶速い。

それを両手で交互に放たれれば、コッチは避けるので精一杯。

『夢想封印』は発動までに少し時間が掛かる。其処をつかれると中途半端にしか発動しない。

アイツに隙が出来るのを待つしかないけど、それも何時に為るか分かったもんじゃない。

コッチの通常弾幕が効くならガリガリ削るんだけど、コイツにはその手が使えない。

それなのに、アイツは遠慮なく攻撃して来るなんて卑怯よ！

こんな事に為るなら、リュウの奴を連れて来れば良かった……って、私は何を考えてるのよ！

神社を出る時にはつきり必要ないって言ったのに、ピンチになって居てくれればって何よ！

私は誰かに頼る事無く戦ってきた。今までもそうだし、此れからだってそう。

だから、アイツの力に頼る気は毛頭ないわよ！！

「たく、何を考えてるのよ私は……って、しまッ？！」

余計な事を考えていた所為で、アイツの射線上に入ってしまった。弾は既に発射されているし、此処は結界を張って弾を防ぐしかない。私は直ぐに目の前に結界を張るけど、アイツの弾は貫通して来た。

結果が破られるなんて思っていなかったから、次の手を考えていなかった。

アイツの弾は後30cmもしないで私のお腹を貫通する。今から回避なんて間に合う訳がない。

私は弾で貫かれることを覚悟し瞼を閉じたが……痛みは何時まで経っても感じなかった。

それどころか、誰かに抱き抱えられている様な感じがする。

私はゆっくりと瞼を開くと……其処には人と竜の中間の様な存在の姿があった。

「大丈夫か、霊夢」

「え……あ……」

突然の出来事で困惑してるけど、この存在から感じる力でコイツが一体誰なのか直ぐに解った。

見た目なんかは完全に別人だけど、コイツは間違いなくリュウだ。

なんでコイツが此処に居るのか解らないけど、一つだけはつきりと解る事がある。

それは……私はリュウに助けられたと言う事だ。

「あ、アンタ……如何して……」

「悪いが話しは後だ。それよりも来るぞ」

それだけを言うと、リュウの奴は私を上空に放り投げた。

私を放り投げた直後に、人形の弾丸がリュウを貫くが……アイツはこの程度で怯んだりしなかった。

それどころか、貫かれた事などお構い無しにリュウは人形に殴り飛

ばす。

殴られた人形の身体はその部分は凹むけど、この程度では止まりはしない。

殴り飛ばされた事で距離を取った人形は、その位置から私達に向かって弾を連射して来る。

ただ対象が私一人から二人に変わった事で、人形の弾幕にかなりの隙間が出来る。

そのお陰で回避が先程よりもずっと楽になった。

「霊夢、一気に決めるぞ！」

「私に命令するな！！」

私はつい悪態を付いてしまったが、リュウはそんな事は気にせず人形に突撃していった。

放たれる銃弾をかわし間合いを詰めると、人形を上空へ高々と殴り飛ばす。

飛ばされた衝撃で人形の動きが遅くなるけど、未だに停止する気配は無い。

けれど、私がコレを発動するには十分な隙が出来た。

「霊符『夢想封印』！」

私の周囲に出現した七色の光弾は、物理法則を無視し一斉に人形へと向かって行く。

人形は光弾を避けようとするが、空中では動けないのか、それともアイツの攻撃が効いたのか、ともに動く事が出来ず全ての光弾が直撃した。

被弾した人形は動きと止め、そのまま地面に激突し粉々に壊れた。

「ふう。…大丈夫か霊夢」

力を押さえ込んだのか、何時もの姿に戻ったリュウは何食わぬ顔で私の傍にやって来た。

それがなんだか気に入らなかった私は、リュウの顔を思いっきり引っ叩いた。

「いたッ?! なにすんだよ霊夢!!」

「……アンタ、一体何しに来たのよ」

「なにつて、霊夢を助けに……」

「私を助けに来た? そんなの大きなお世話よ!!」

「なッ?! 助けに来たのにそんな言い方は無いだろ!!」

「うっさいわね! 誰が何時助けに来てくれって言ったのよ!!」

「俺が来なかったら危なかったのは確かだろ!!」

「お腹が撃ち抜かれた程度じゃ死なないわよ!」

「そう言う問題じゃないだろ!!」

こうして私達は、お互いに見つとも無く怒鳴り声を挙げて口喧嘩を始め、今まで感じていた不平不満を思いっきりぶつけ合った。

「大体、なんで境内の掃除は何時も俺なんだよ! 偶には霊夢がや

れよー!!」

「アンタ居候でしょ！　なら、文句言わないで家主に従いなさい！
」

「神社は霊夢の家だろ！　だったら少しは自分でやれ！！」

「私だって色々やってるじゃない！！」

「昼寝と茶を飲んでるだけだろ！！」

「うるさい！　アンタだって、山道整備とか無駄な事に時間を費や
してるじゃない！！」

「無駄って言うなーッ！！」

自分でも驚く位に大声を出して、今まで溜めていた事をリュウにぶ
つけた。

最後にこんな風に喧嘩をしたのは一体何時だったか、そんな事も分
からない位久し振りの大喧嘩。

ずっと大声を張り上げているからか、段々と喉が哽れて声が出なく
なり始めた。

それはリュウも一緒に、お互いに少しずつ声が小さくなってい
った。

「大体、なんで助けに来たのよ…。必要ないって言ったじゃない」

「霊夢が心配だったから」

「それはさっきも聞いたわよ。なに？　^{アンタ}竜と違って脆い人間がそん
^{わたし}

なに心配？」

「……確かにそれもある。だけど、俺に取って霊夢は大切な人だ。だから心配になるんだよ」

こ、コイツ。よくこんな状況でそんな台詞が言えるわね。

前にも同じ事言われたけど冗談……って事は無いでしょうね。

冗談なんかでこんな事が言えるとは思えないし、リュウはそんな事を言うタイプじゃない。

だとすると……コイツ、本気で言ってるの？！

あの時は異変解決を優先して適当に流したけど、改めて言われると結構困るわね。

「ちよつと、いきなり変な事言わないでよ」

「変な事ってなんだよ！俺は真剣なんだ！」

「だったら尚更困るんでしょう……！」

「困るってなんでだよ！……もしかして、霊夢は俺が居ると邪魔なのか？」

「それは……その……」

……如何、なんだろ。私、そんな事今まで考えた事なかった。

なんの前触れもなく突然現われた奴だけど、邪魔だとは思わなかったな。

今まで一人と思って生きてきたけど、気が付いたらリュウが隣りに居るのが当たり前になってた。

その事を邪魔だとか迷惑だとか感じなかったし、隣りに居る事をこ

く普通に受け入れていた。

……もしかして、コレってそう言う事なの？

いや、でも、私今までちゃんとした恋愛とかないから、そう言うのはイマイチ分からないし……。

「如何なんだ霊夢。もし、邪魔だつて言うならはつきり言って欲しい」

「いや、その……アンタが嫌いって事はないんだけど、本当に好きなのか自分でも気持ちの整理が付かないと言うか……／＼／＼」

「……はい？」

「でもでも、リュウと一緒に居るのが当たり前だと思ってたから、今更何処かに行かれるのも困るって言うか……あゝもう！ 何を言ってるのよ私は……！」

「いや、本当に何を言っているんだ？」

「兎に角！ まだ気持ちの整理が付かないから、少し私に考える時間を頂戴……！」

「え、あ、うん。分かった」

「ホント?! ありがと、リュウ！」

イマイチ肅然としない返事だったけど、とりあえずコレで考える時間が出来たわね。

この間に自分の気持ちをはっきりさせないとね。……だけど、答え出すまでにどれ位掛かるかしら？

恋愛経験なんて皆無なんだし、誰かに興味を持ったのは今回が初めてだから、かなり時間が掛かりそうね。……でも、まあ、コイツとは一緒に暮らしてるんだし、変に焦る必要はないわよね。

「えーっと、霊夢。俺は今まで通り博麗神社に居て良いのか？」

「何言ってるのよ。そんなの当たり前じゃない」

「そ、そっか」

「分かったんなら早く帰るわよ。人里で報告と報酬を貰わないといけないんだから」

「俺、荷物持ちですか？」

「当たり前でしょ」

リュウは私の返事が予想出来たのか、やれやれと言った様子で溜息を一つ吐いた。

その【分かってますよ】みたいな態度に少しムツとなるけど、此处は我慢して先を急ごう。

コイツがこう言う態度を取るのは予想出来ていたし、今回はお相子だ。

「それじゃ行くわよ、リュウ」

「嗚呼、分かった」

ついさっきまで怒鳴り合っていたのに、今では並んで空を飛んでいる。

お互いに単純だなと思いつつも、こう言つのも悪くないと思う。
……少なくとも私は嫌いじゃないかな。

第十三話 妖怪退治・後編（後書き）

勘違いから始める恋ってあると思うんだ。異論は認める。
……それにしても、コレ二つに分ける必要があつたかな？

第十四話 吸血鬼の戯れ

人里で暴れた人形を破壊した俺達は、その残骸を回収し森近さんの店に持って行く事にした。

霊夢曰く、コレは外の世界で作られた物じゃないし、幻想郷の物でもないそうだ。

だから？未知のアイテムの名称と用途がわかる程度の能力？を持つ森近さんに鑑定して貰う事になった。

用途については、あの暴走具合を見る限りだと戦闘用だと思うけどな。

まあ、回収した道具をあの人所に持って行かないと行けなかったし、丁度良いと言えば丁度良いんだけど。

「それじゃ行くわよ、リユウ」

「おう」

大きな籠一杯の道具を持って、俺は霊夢の案内の元『香霖堂』へと向かった。

……霊夢と言えば、あの一件以来妙によそよしくなったな。

普通に暮らしている分は大丈夫なんだけど、俺が近付くと「近いッ！」とか言っただけで殴って来るんだよ。……俺、何か悪い事したかな？コレと言っただけで思い当たる節は無いし、本人に聞いても「なんでもない」って返されるし。

ホント、幻想郷は謎に満ちているよな。……この場合、霊夢が謎なのか。

霊夢に案内されて歩く事、一時間弱。漸く森近さんの店に到着した。飛んで行けば30分も掛からないらしいけど、俺はこんな重い物を持ったまま空を飛ぶ事が出来ない。

最初は飛んで行こうかと思っていたんだけど、荷物が重過ぎて上手くバランスが取れなかった。

そう言った事情から歩いて行く事になった訳だが……未完成だけど、頑張つてあの道を整備していた甲斐があったよ。

獣道のままだったら、物凄く歩き辛かったろうしな。

「こんにちわ。霖之助さん居る？」

「いらっしやい霊夢。今日はリュウも一緒か」

「どもです。頼まれていた通り、道具を集めて来ましたよ」

「有り難う」

「そのガラクタ買い取る序でに、変な人形の鑑定もしちゃつてよ」

「変な人形？」

俺は背負っていた大きな籠を店のカウンターに置いた。

籠の中には、古い本や黒い円盤状の何かに用途不明の箱なんかがある。

幾つも入っている中で、一番の存在感を放っているのが例の人形だ。そして、この中で一番重かったのもこの人形だ。……本当、何十? 在るんだツてくらいに重かった。

「……た、確かに変な人形だね。これは如何したんだい？」

「この間『無名の丘』で暴れていたのを、私とリュウで倒したのよ」

「それで、この人形が異変の前兆だと困るから森近さんに鑑定して貰おうって事に」

「僕の能力は飽く迄、その道具の名称と用途を知るだけなんだけど……」

「でも、何も知らないよりはマシでしょ？ だからお願いね」

「やれやれ。……君も苦勞してそうだね」

「あ、あははは……」

「……其処は否定しなさいよ」

否定しろとか言われても、苦勞してるのは事実だからね。
別にあの神社に居たなくなる程じゃないけど、即答で否定出来ないんだよ。

「とりあえず、さっさと鑑定するから暫く待つて居てくれ」

「手早くお願いね」

「……無茶を言わないでくれ」

森近さんはカウンターに置いた籠を抱えると、そのまま店の奥に引っ込んでいった。

俺達は鑑定が終わるまで暇なので、この店の売り物を覗く事にした。

……
……
……

鑑定が始まって既に一時間が経った。

霊夢は暢気にお茶を飲みつつ、店に置いてあった本を読んでいる。
一方俺は、この店の商品を片っ端から調べていた。

この店は外の世界の道具を取り扱っているから、色々面白い道具を置いてある。

……とは言え、俺には殆どの商品の用途が分からず、見ては直ぐに他の物を手に取っている状態だが。

外の世界は、幻想郷こゝろとは違って科学技術が発展した世界だとか。

その為だろうか、この店に置かれている物や俺が見つけた物の殆どが、この世界の雰囲気ふんいきに合わない物ばかりだ。

此処まで雰囲気ふんいきに合わない物ばかりだと、外の世界とやらが如何なっているのか気になるな。

店の中を物色していると、突然店の扉が開いて誰かが入って来た。

霊夢は興味ないみたいだけど、俺は興味が湧き扉の方を覗き込んだ。
扉の前に居たのは、紅い屋敷ベニヤシキの幼い主と銀髪のメイドだった。

「あら？ 珍しい所で会ったわね、カイザー皇帝さん」

「……その呼び方止めて欲しいんだけど」

「だってコレが貴方の名前なんじゃないの？」

「俺の名前はリュウだ。それ以外の無いモノでもないよ」

「そう。……ところで、貴方達は何をしているのかしら？」

「俺達は――」

「霖之助さんを待つてるのよ。アンタ達も買い物なら暫く待った方が良いわよ」

俺が答えようとしたが、それよりも先に霊夢が彼女の質問に答えた。答えはしたけど、霊夢は相変わらず本を読んでいて、ともに彼女達の顔を見ていない。

流石にその態度にメイドは険しい表情になるけど、レミリアは特に気にしては居ない様子だった。

「そうなの。なら、私達も少し待ってようかしら」

「お嬢様、宜しいのですか？」

「構わないわ。…それよりも咲夜。何か面白い物が無いか捜して来なさい」

「畏まりました」

咲夜と呼ばれたメイドは、レミリアの無茶振りを二つで了承した。珍品ぞろいの香霖堂だけど、我が侘な彼女を満足させられる様な物があるのだろうか？

と言つか、あんな無茶振りを二つ返事で了承出来る彼女は凄いと思う。

「それで、貴方は何をしてるのかしら？」

「…俺も君と同じで暇潰しの物を探してるんだよ」

「貴方と同じなんて心外ね。それじゃ、私が暇人みたいじゃない」

「……違うのか？」

「違うわよ」

うーむ。レミリアの私生活なんて知る訳ないし、はっきり否定され
ると何も言えなくなるな。

でも、この子が何か仕事をしてるとは思えないんだよな。

あの屋敷でも、偉そうな椅子に座ってふんぞり返っているだけな気が
するし。

「……貴方、今不愉快な事を考えなかった？」

「多分、気のせいだよ」

「そうかしら？」

「そうだよ」

「……………」

な、なんだこの妙な沈黙は。物凄く居心地が悪いぞ。

確かに不愉快にさせる様な事を考えたけど、それは心の中での事だし、聞かれたりしてない筈。

だと言っのに、この居心地の悪さ一体なんだ?! レミリアは心の中を読む事が出来るとも言っのか!?

……微妙にキャラが崩壊してるから、一旦落ち着け俺。

「お嬢様。面白い物を発見しました」

「あら、何かしら? ……………ねえリュウ。コレを食べてみる気は無い?」

「ん? どれだ?」

レミリアが俺に見せて来たのは『おじや』と書かれた箱だった。

……ただ、レミリアの持ち方が少し可笑的い。

幾らこの子が幼いとは言え、箱に書かれている文字を隠すように持つのは変だ。

と言うか、『おじや』と言う名前の物にあまり良い思い出が無いんだよな。

「……とりあえずだ。その箱をコッチに渡してくれないか?」

「いやよ。貴方は? イエス? か? はい? で答えなさい」

「それ拒否権ないよな?!」

「そんな事ないわよ。だから答えなさい」

「……なら? ノー? で」

「却下」

「……………」

コイツ、俺に何が何でもこの『おじや』を食べさせる気だ。
そんな事無いとか言いつつ、即答で却下して来たのが良い証拠だ。
……さて、如何する？ このまま言い合いしていても勝てる気がしないぞ。

だからと言って、逃がしてくれる訳が無い……と言うか、既にメイドが『おじや』を用意してる。

マジで如何しよう……。何か上手く逃げられる手が思いつかないぞ。

「さあ、早く食べなさいリュウ。嫌だと言うなら、無理矢理食べさせるわよ」

「くッ」

――ビリッ――

……今、何かが破ける音がしたけど、そんな事を気にしてる場合じゃないか。

既にメイドはスプーンを持ってスタンバイしてるし、レミリアは逃げられない様に臨戦態勢だし……万事休すか？

いや、案外アレは普通の『おじや』って可能性が……ある訳ないよな。

「全く、貴方も強情ね。……咲夜、やりなさい」

「承知しました、お嬢様」

「ちよっ、やめッ?!」

既に俺に逃げ場は無く、このまま嫌な予感しかしない『おじや』を
食べる破目になるのかと思いきや――、

「……君達、僕の店で何をしているんだ？」

「森近さん！？」

――救いの主が店の奥から現われてくれた。

……ヤバイ。森近さんに光が差し込んで輝いている様に見える。

「チツ。空気の読めない奴ね」

「……？ 意味が分からないのだが……」

「そんな事より森近さん！ 鑑定の結果は？！」

「あ、嗚呼。……あの人形の名前は『バーサーカー』。用途は敵を
殲滅する事だ」

「見たまんまの用途って訳ね」

「そうらしい。……ところで霊夢。その破けた本は買い取ってくれ
るんだろうね？」

「嫌よ。それにこの本は最初から破けていたわ」

「……そんな事は無かったと思うけどな」

あ、さっきの破けた音は霊夢が本を破いた音なのか。
何を思っただんな事をしたのか知らないけど、流石に店の商品を破

くのは不味いだろ。

「まあ、それは兎も角して。リュウ、買い取った商品の決算をした
いんだが」

「はいはい」

俺は二人から逃げ出し、店のカウンターに近寄った。

それなりの量を持っていったから、あの竹竿が買える位の値段に為
っている筈。

もし無理だったら……自作するしかないか。釣り糸と針くらいは買
えるだろ。

「例の人形も含めると、一万円って所だね」

「……予想以上に高い」

「あの人形に使われている材質も珍しいし、制作技術も独特だから
ね。壊れていなかったらもつと高値で買い取りたい位だよ」

「それは止めておいた方が良いわよ。アレが暴走したら、霖之助さ
んじゃ一撃で死ぬだろうし」

「……そんなに危ない物なのかい？」

「ええ。まあ」

準備不足だったとは言え、霊夢一人でも倒し切れなかった相手だ。
この狭い店で暴走でもされたら、森近さんじゃきつと避け切れない
だろうな。

「ところで霖之助さん。アレが何処で作られた物か分かる？」

「……少なくとも幻想郷や外の世界の物じゃないね。一番可能性が高いのは『魔界』だと思うけど」

「成る程ね……」

俺は『魔界』とやらは初めて聞いたけど、霊夢には心辺りがある様だ。

彼女の顔を見るとそれは分かるけど、なんであんなにも嫌そうな顔をしているんだ？

その後俺は、森近さんから代金を受け取った。

あの人形を手元に残しておく気の無かったので、他の道具と一緒に買い取ってもらう事に。

お金を貰った後、また二人に捕まる前に霊夢を連れて急いで帰る事にした。

手を繋いだ時、霊夢の顔が赤かった様な気がするけど……きっと気のせいだろ。

第十四話 吸血鬼の戯れ（後書き）

オマケ

「……お嬢様、このおじやは如何いたしましょう」

「店主さん。コレを食べてみる気は無い？」

「まだ死にたく無いから、遠慮しておくよ」

「でも、『おじやデス』って名前だったら魅力的じゃない？」

「その名前は『おじやデス』じゃなくて、『デスおじや』だからね。…後で確りと代金は請求させて貰うよ」

「あら、つれないわね」

第十五話 紅魔館の図書館

夏も終わりに近付き、季節はそろそろ秋の装いと為り始めた。

未だ残暑は続いているものの、木々の色づきや日暮れを見ると、もうすぐ秋なんだと思い知らされる。

そんな中でも博麗神社は何時もと変わらず、俺と霊夢は母屋の縁側でお茶を啜っていた。

「……もうすぐ秋だな」

「そうね」

「秋って何かあったけ？」

「落ち葉が大量に出るから、掃除頑張ってるね」

「霊夢もやれよ」

「……最近のリユウって、私に対する言葉遣いが荒くない？」

「そんな事は無い。仮にそうだとしても、それは霊夢に心を許し始めた証だと思う」

「……そう言う事しておくわ」

他愛の無い話をしつつ、俺達は手元にあるお茶を啜る。

神社への山道も大体出来たし、今はコレと言ってする事が無い。

この間納品で、予想以上にお金も入ったし、釣竿でも買って何処かに釣りに行っても良いかもな。

頭の中ではそんな事を考えているんだけど、なんとなく神社でまつたりとしていた。

別に動きたくない訳じゃないんだが、此処最近は道具蒐集や山道整備で動いてたからな。

偶にはこうしてノンビリしても良いよな。

「よっ、ご両人。遊びに来てやったぜ」

「「帰れ」」

「……いきなりヒデエな、おい」

縁側でのほほんとしていたら、いきなり魔理沙がやって来た。

前に来た時も唐突だったけど、今回も唐突に来たな。……まあ、事

前に連絡を取る手段がないんだし、来るのが唐突に為るのは仕方が無いのか。

でも、前みたいに『マスターパーク』を撃たれるのは嫌だなあ。

「で、今日は何しに来たのよ。魔理沙」

「いやな。この前の紅い霧異変の事を聞きたくて」

「……アレって随分前な気がするけど」

「まだ一月も経ってないぜ」

「そうだったけ？」

「そうみたいね」

ホントに最近色々動いていたからな、時間の感覚が少し可笑しくなってるみたいだ。

……それにしても、魔理沙も行き成りへんな事を聞いて来るな。あの異変の事を聞いたって、特に面白い事なんか無いと思うぞ。

「アンタも物好きね。アレは只の異変よ」

「話す位別に良いだろ。わたしは現場に立ち会えなかったんだし」

「まあ、別に良いけどね」

個人的には余り話したくないけど、霊夢が良いなら別に良いか。

………

………

…

多少ボカしつつ、霊夢はあの異変の事を魔理沙に教えた。

ボカした部分は、主に俺の力の事だ。

幻想郷で暮らしていれば、何れはバレると思うけど……別に話さなくても良い事か。

それに本物の神様も居る幻想郷だ。竜の一体が神社に住み着いても問題はないだろう。

「あの異変の事はこれで全部よ」

「吸血鬼の住む館かあ……。なんかお宝とかあるのかな？」

「知らないわよ、そんなの」

「……お宝か如何かは知らないけど、あの屋敷の地下に大量の本が在ったな」

「大量の本って……地下に図書館が在るって事？」

「そう言う事。なんの本かは知らないけど」

「地下の図書館か。……こりやお宝の匂いがするぜ！ リュウ、案内頼む！！」

「……へっ？」

突然の出来事で、何が起こったのか把握するのに時間が掛かった。とりあえず、俺は魔理沙に拉致された事だけは理解出来た。

……うん。如何してこうなった？ 別に俺を連れて行く必要なんて無いよね？

「ちよつと魔理沙？！ 勝手にリュウを連れて行かないでよ！！」

「少し借りるだけだぜ！！」

「俺は物じゃねえええツ！！」

必至の叫びも空しく、俺は魔理沙に腕を引っ張られたまま空を飛ぶ羽目に為った。

しかし、俺を引っ張って空を飛べるなんて、魔理沙って意外と力が強いのかも。

……

……

…

魔理沙に引っ張られるまま、俺は再び紅魔館へとやって来た。

一応、逃げ出そうと抵抗はしたものの……脅されてあえなく屈服してしまった。

……ゼロ距離でマスパを放つとか、幾らなんでも酷いと思うんだ。

今回はトランスする暇がなかったから、既にボロボロです。……物凄く帰りたい。

「此処が紅魔館か……。思ったよりもデカイな」

「そうだな……」

「ん？ 如何したリユウ？」

「いや、門番なのに門を見張ってないって如何言う事なのかと」

「きつと昼寝の時間なんだろ」

「……それで良いのか紅魔館」

正直な話、前回みたいに門番が立ちはだかと思っていたんだけど、寝てるって如何言う事だよ。

個人的には、門番が俺達を撃退してくる事を期待してたのにな。
……あ、魔理沙に迎撃されるに決まってるか。じゃあ、此処に居る
門番の意味って一体……。

「それじゃ、図書館への道案内頼むな」

「……へい」

物凄くげんなりしながら、俺と魔理沙は紅魔館に侵入した。

屋敷の中は相変わらず紅いが、そんな事は気にしていられない。

あのメイドと主に出くわす前に、さっさと図書館に魔理沙を置いて
こないと。

「へえ」。外だけじゃなくて、中も紅いとか悪趣味だな」

「確かに此処まで紅いと、他の色が欲しくなるな」

「例えば何色だ？」

「例えば………白とか？」

「それだったら目出度い感じになりそうだな」

「そうなのか？」

あの世界で紅白が目出度いって風習は無かったと思う。

……と言つか、ずっと戦い続けていたからそう言うのは良く分らないな。

そう考えると、かなり寂しい人生を送ってたんだな俺。

「……はあ」

「如何したリュウ？ 恋わずらいか？」

「なんでそうなるのさ」

「其処は乗って来いよ。つまらないな」

「……じゃあ、俺が告白したら如何する心算だ？」

「ごめんなさい。わたし達、良いお友達で居ましょう」

「うん。そう来ると思ったよ」

「お、リュウもわたしの付き合い方が分かって来たな」

「……出来る事なら解りたくなかった」

「酷いなおい」

俺は魔理沙を適当にあしらいつつ、地下にある階段を目指した。

その道中で、この屋敷の妖精メイド達が襲って来るけど……特に気にはしない。

大抵は魔理沙が一人で蹴散らして行くから、俺が出る幕が無いんだよ。

……

…

メイド相手に暴れる魔理沙を引き攀れ、俺は地下の図書館までやって来た。

図書館は相変わらず大量の本があつて、少々たじろいでしまう。コレだけの本を一体何年掛けて集めたのやら。あのパチュリーって奴は凄いな。

「おおッ！　こんな所にこんなにも本が有るなんて知らなかったぜ！！」

「満足したか魔理沙？　それじゃ俺はこの辺で」

「まあ、待てよりユウ。もう少しわたしに付き合えって」

「いや、霊夢も待つてるだろうし、早いとこ帰りたいんだけど」

「……知ってるかりユウ。門限つてのは破る為にあるんだぜ？」

「それ、絶対に違うから」

魔理沙は俺のツツコミを無視して、本棚にある本を物色し始めた。このまま帰ってしまおうかと思っただけど、地下に変な力が居るのを感じる。

前に来た時は感じなかったのに、今になって如何して？

俺の持っている竜の力とも違うし、ただの妖怪……にしてはかなり異質だな。

「其処で何をしているんですか？」

「ん？」

何処からか感じる力に関して考えていると、右の方から女性に声を掛けられた。

この屋敷の住人とは大体会った心算だったけど、この声は初めて聞いたな。

初対面の相手だし、此処はちゃんと自己紹介をしておかないとな。

そう思った俺は、彼女の方を振り向いた。

其処に居たのは、白い長袖のシャツに袖のない黒のブレザーに、黒のロングスカートを穿いた、頭と背中に黒い羽を持つ赤い髪の悪魔だった。

……いや、吸血鬼の屋敷だし悪魔が居ても可笑しくないよな。

「あの……」

「あつと、俺はリュウ。此処には……あれ？ 何しに来たんだ？ 魔理沙に案内してくれて頼まれただけだしな」

「魔理沙って、さっきから本を物色している魔法使いの事ですか？」

「そうそう。ホント、何をしに此処に来たのやら」

魔理沙に何をしに来たのか聞こうと思い、彼女の方を見てみると……既にその姿は無かった。

流石にもう帰ったって事は無いだろうけど、何処に言ったんだアイツ？

辺りと見てみるが、魔理沙の姿はない。あの悪魔も見ていたから、さっきまで居たのは間違いないんだが……。

「ちょっと其処の白黒。私の図書館で何をしているのよ」

「少し借りるだけだぜ」

「この図書館は貸し出し禁止よ」

「ちょっとだけなら良いじゃないか」

「駄目よ」

「そうか。……だったら、力付くで借りて行くぜ!」

「今日は喉の調子が良いから、全力で撃退してあげる」

……此処からじゃ姿は見えないが、如何やらパチュリーと戦う気の様だ。

魔理沙の魔法もそうだけど、パチュリーの魔法も結構派手だからな。

……此処に居たら確実に巻き込まれるな。

「あの、悪魔さん。何処か安全な場所はない?」

「では、こつちへどうぞ」

「お願いします」

俺は悪魔の少女に連れられて、この図書館から逃げ出した。

あの二人も弾幕ごっこに巻き込まれるなんて、堪ったもんじゃないからな。

レミリアや銀髪メイドと出くわす事になるかも知れないけど、図書館に残っているよりはマシだろ。

第十六話 悪魔の妹

魔理沙とパチュリーの弾幕ごっこから逃げ出した俺と子悪魔さん。図書館には今近づけないし丁度良い機会なので、この子に屋敷の案内をして貰っている。

この屋敷、見た目以上に中が広いと思ったら、あの銀髪メイドが空間を弄って広くしているとか。

……あの人、華奢な見た目以上にとんでもない能力を持つてるよな。小悪魔さんの話だと、空間を弄る以外にも時を止めたりも出来るそうだし。

能力だけなら、吸血鬼以上に強力な気がする……と言つか、俺より上だな。

時を操作出来る竜なんて、俺の中には居ないっての。

「なんであのメイドがレミリアに付き従ってるのか謎だな」

「それはきっとアレですよ。お嬢様のカリスマが凄い証拠ですよ」

「カリスマ…ねえ」

そんな事言われても、あの見た目の所為でイマイチ迫力に欠けるんだよな。

確かに力を解放した時の威圧感は凄かったけど、抑えてる時は普通の子供にしか見えない。

子悪魔さんの話だと、アレで五百歳らしいが……成長が遅いってレベルじゃないぞ。

「……あ、そう言えば聞きたい事があったんだ」

「はい。なんででしょう?」

「この屋敷の地下に変な力があつたけど、アレはなに?」

「変な力と言うのが何か分かりませんが、紅魔館の地下にはパチュリー様と妹様しか居ませんよ」

「妹様?」

「レミリアお嬢様の実の妹である『フランドール・スカーレット』様の事です。普段から屋敷の地下で生活してるんですよ」

「へ」

あのレミリアの妹ねえ……。なんか、あの子以上の我が侘な気がする。

いや、実はあの姉を反面教師にした品行方正な良い子な可能性も……ないか。

寧ろ、この幻想郷でそんな子が居るのか如何かを物凄く聞きたい。俺の知り合いつて癖の強い子ばかりだからな。

「私の知る限りでは他に居ない筈ですので、リュウさんが仰っているのは多分、妹様の事だと思いますよ。……お会いになりますか?」

「いや、それは遠慮して——」

俺が断ろうとした時、突然目の前の床が何かに破壊された。余りにも突然の出来事に、俺達はその場に立ち止まり固まってしま

う。

一体何事だ？ まさか、二人の弾幕ごつこの被害が此処まで出た訳じゃないよな？

まだ状況が読めず、その場で呆然としていると……目の前の穴から、七色に光クリスタルが付いた異形の翼を持つ、赤い服を着た薄い黄色い髪の少女が出て来た。

「い、妹様？！ 如何して此処に！？」

「妹様つて、あの子がレミリアの妹か……」

小悪魔さんの反応で、あの子が誰なのか理解出来たけど……なんでいきなり出て来たんだ？

態々挨拶の為に出来た……って訳でもないだろうし。本当に何をしに来たんだ？

「……見つけた。お兄ちゃんがあいつが言っていたリュウね」

「（あいつ？）……確かに俺がリュウだけど、君とは初対面だよな？」

「うん。でも、貴方の事はあいつから聞いてた。なんでも、面白い能力を持ってるんだってね」

「別に面白くはないと思うぞ？」

「変身するんだし、十分に面白いよ。……折角だし、そのカフランにも見せてよ……」

それだけ言つと、フランドールは行き成り弾幕を放つて来た。

あの子の狙いは俺らしく、弾幕を自分の周囲に放ちながらも確りとコツチを狙ってくる。

でも、この位の弾幕ならまだ避けられる。前に戦ったレミリアのスペカよりは楽だ。

俺は手元に剣を召喚し、斬撃の形をした弾幕で応戦する。

コツチの弾幕は連射出来ないが、速度・威力ともに十分にある。

……やっぱ、無手よりも剣で戦うほうが性に合ってるのかも知れないな。

「お兄ちゃん。今どうやって剣を出したの？」

「まあ、ちよつとした手品みたいなもんかな」

「へえ」。なら、私も剣を出すからね！」

「好きにしてくれ。……小悪魔さん、貴女は早く逃げた方が良いぞ」

「そうさせて貰います」

彼女は一目散で来た道を引き返し始めた。

出来る事なら俺も逃げ出したいけど、多分見逃してくれないんだろ
うな。

……と言うか、今この場を逃げ出したら癪癪起こしてもっと面倒に
為りそうだ。

「それじゃ行くよ。…禁忌『レーヴァテイン』」

フランドールが一枚目のスペカを宣言すると、彼女の手に自分の身長以上に長い赤い剣が出現した。

アレはレミリアが使った『スピア・ザ・グングニル』と同じ系統の

スぺカなのか？

それならまだ避け易くはあるけど、槍みたいに投げない分厄介そうだな。

「それじゃ行くよ！」

「ッ！ 覚悟を決めるしかないか！」

俺はフランドールの太刀筋を見切り、それを避けた後にコツチの弾幕を放つ。

彼女は俺の弾幕を避けた後、また赤い長剣で切り掛かってくる。あの華奢な腕の何処にそんな力があるのか知らないが、今度振り落とされた剣はかなり速い。

今の身体じゃ避け切るのは難しいと判断した俺は、刀身の上を滑らせ、フランドールの剣を逸らす事にした。

剣を逸らす事は成功したけど、今で刀身がかなり削られた。後数回、同じ事をしたら確実に剣が折れるな。

「手に入ったばかりだから、もっと大切にしたかったんだけど……仕方が無いか」

正直な所、剣を気遣って戦っていたら間違いなく落とされる。

出来る事ならそんな事はしたくないけど、この戦いで剣が折れるのも覚悟しないとな。

「まだまだ行くよ！」

「そうかい！」

フランドールは宣言通り、赤い長剣を振り回してくる。

俺はそれを掠りながらもなんとか回避していく。

お陰で剣はボロボロ。あの輝きを放っていた剣は、見るも無残な姿になっていた。

相手を直接斬る事は出来ないだろうけど、弾幕を放つ事は出来るだけマシか。

「コレで如何だ！」

「なんの！」

俺はフランドールの一撃をかわし、お返しに弾幕を叩き込んだ。

この一撃が効いたのか、あの赤い長剣は突如消滅した。

……スペカー一つ攻略するのに随分と時間が掛かったな。他にもあるのかと考えると気が滅入る。

「あゝあ、攻略されちゃったか。……それじゃ次のスペカね！」

「……切り替え早いな」

「二枚目！ 禁忌『フォーオブアカインド』！」

彼女が二枚目を宣言すると、突如フランドールが四人に分身した。

……分身って、そんなスペカもアリなのか。

いや、竜に変身する用のスペカを作った俺が言う事じゃないな。

「さあ」

「続きを」

「始めようよ」

「お兄ちゃん」

「……分かったから、喋るのは誰か一人にしてくれ」

四人一斉に喋られなかっただけマシだけど、一区切りつつ喋られるのも変な感じだな。

そんな俺の気持ちなど露知らず、フランドール達は一斉に弾幕を放って来た。

当然の様に全員が俺を狙ってきてるが、四人同時に放って来るから弾幕が厚く感じられるな。…実際に厚いんだが、それでも回避するスペースは残っているだけマシか。

俺は四人のフランドールの弾幕を回避しつつ、斬撃を飛ばし少しずつダメージを与えて行く。

途中で弾幕のパターンが変わりはしたが、それでもまだ余裕はある。俺は弾に掠りつつも、なんとか二枚目のスペカを攻略した。

「おお！ 二枚目もクリアされた！」

「…攻略された割りに楽しそうだな」

「うん！ 長い事地下で暮らしてたからこんなに楽しいのは初めて！ ……だから、そろそろ本気で行っても良いよネ？」

「ッ?!」

突然フランドールの雰囲気が変わった。

さっきまで無邪気な感じだったのに、今は狂気じみたモノを感じる。あの子の表情も口角が上げて、禍々しい笑みになっている。

……さっきまでは只の遊びで、こっからが本番って事か。

元を正せば、この弾幕ごっこも遊びなんだけどな。遊びの本番って一体なんだよ。

「三枚目。禁忌『カゴメカゴメ』」

フランドールが三枚目を宣言すると、俺の周囲を弾幕で囲まれてしまった。

ただ、周囲を囲んだだけで動く気配がない。

随分と変わったスペカだと思っていると、フランドールが別の弾を放ち、この囲いを崩し始めた。

別の弾に当たり崩れた囲いは、只の弾になってバラけ周りに散らばった。

まだ崩れ切っていない箇所があるけど、それでもまだ避けられるか。正直な所、自分のスペカを使って回避とかしたいんだけど……大したもの持って来て無いから無駄遣い出来ないんだよ。

回避に集中するから弾を撃つ余裕はないけど、これはまだ気合で避けられるだけマシだな。

「…上手ク避ケルネ。ナラ、コレハ如何？ 禁弾『スターボウブレイク』」

三枚目を避け切れたのか、フランドールは四枚目を宣言した。

四枚目のスペカは、カラフルな弾を狙いも無くばら撒く感じのものだった。

ただ、一度に放つ弾の数が多く、弾速もバラバラだから回避するのが難しい。

極端に速い弾はないけど、極端に遅い弾がある。

速いのは目が慣れてるから良いけど、あまり遅い弾があると反応が変になる。

弾の数も多い上に、速度の緩急にも気を付けないと………って？！

「ぐあッ！」

「マズハ一回ダネ。オ兄ちゃん」

あ、頭では分かっていたのに、ちゃんに対応出来なかったか……。一回も被弾せずに勝てるとは思ってなかったけど、あの子の弾幕が予想以上に痛い。

この先もこんな弾幕だとすると、今の姿じゃコレ以上はキツイか。今、手元にあるのは『オーラ』しかないけど、仕方が無いな。

俺はポケットに入っているスペカを取り出し――、

「基礎『オーラ』！」

――そのカードを宣言した。

スペカを宣言した俺は、足元から立ち上った赤い光に包まれ、人と竜の中間の姿になる。

この姿を見たフランドールは驚き顕わにしたが、直ぐに禍々しい笑みを浮かべた。

今まで色んな奴にこの姿を見せてきたが、あんな笑顔を浮かべた奴は初めてだな。

まあ、個人的には『オーラ』ではなく『カイザー』で戦いたかったが……仕方が無い。

「ソレガオ姉様ノ言ッテイタ姿力……。ウン、ソノ姿デ戦ッタラ物凄ク楽シソウ」

「……戦いを楽しむ感覚は俺には理解出来んのだが、まあ良い。さっさと続きを始めるぞ」

「分カッテルヨ。……禁弾『過去を刻む時計』」

フランドールが五枚目を宣言すると、二つの魔法陣が出現した。その魔法陣は四方向から光を出すと、回転しながら俺に向かって来る。

フランドールはというと、俺に向かって扇状に弾幕を張り始めた。回転している魔法陣は面倒だが、この程度ならさっきの弾幕の方が厄介だったな。

だが、能力は劣っているとは言え『オーラ』も竜の一体。これしきで落されはしない。

俺は回転する魔法陣に気を付けつつ、手刀から斬撃の形をした弾幕を叩き込む。

威力や速度は変わっていないが、竜に変身しているお陰で連射性は上がっている。

使えるスペカが無い以上、この弾幕で押し切らせてもらう。

「……秘弾『そして誰もいなくなるのか?』」

俺が弾幕を叩き込んでいると、フランドールが六枚目のスペカを宣言した。

スペカの宣言と同時にアイツの姿が消え、俺の目の前から弾が迫って来た。

それを回避するのは難しくないが、弾の軌道にそって大量の弾が放たれるのが厄介だな。

しかも、最初に出現した奴以外にも同じ様な弾も迫って来る。

こう面倒な弾幕は、フランドールを攻撃して黙らせた方が早いんだが、本人の姿が見えない以上この手は使えない。

姉もそうだったが、妹もかなり面倒なスペカを考え付くもんだ。
俺は心の中で悪態を付きつつも、迫って来る弾と辺りに飛び散っている弾の回避に専念する。
その弾を回避していると、今度は上下左右から別の弾が迫って来た。弾のパターンは何個があるが、どれも俺を囲い込むように迫って来る。

人のままだったら囲いに閉じ込められるが、今の姿なら僅かな隙間を縫って避ける事が出来る。

この弾幕が何時まで続くのか知らないが、弾の軌道させ読み間違えなければ問題ない。

俺は今までと同じ様に、弾幕を避ける事に専念する。

少しの間弾幕を避け続けていると、唐突に周囲の弾幕が消え去り、フランドールが姿を現した。

「コレモ避け切ルナンテ、才兄ちゃんハ凄イネ」

「それはどうも」

「素ッ気無ナイネ。サツキトハ大違イ」

「……あまり意識はしてないんだが、変身するとこうなるみたいだ」

「フーン……マアイヤ。ソレジャ、ラスト行クヨ！」

「嗚呼」

「Q.E.D『495年の波紋』」

フランドールのラストスペルは、彼方此方に弾の塊を出現させ、そ

れを波紋の様に広げる弾幕。

最初は少なかったが、徐々に波紋の数が多くなり回避するスペースが少なくなってきた。

今はまだいいが、このまま行けば避けれる場所がなくなり詰むか……。

フランドールの姿があるから弾幕を叩き込めるが、向こうの弾幕が厄介になる方が先だな。

そう判断した俺は、一枚のスペカを取り出し宣言した。

「光線『ドラゴンブレス』」

カードを宣言すると、黒い球体に包まれ……中で黒いトカゲにも似た竜になる。

球体から出た俺は、背中から空色の羽を伸ばし空中で静止する。

その状態で口に力を集中させ……その力をフランドールに向けて撃ち放った。

放たれた力は赤い光線となり真っ直ぐ突き進む。

フランドールはコレを回避しようとしたが、間に合わずそのまま飲み込まれていった。

あの子が光線に飲み込まれたのを見て、俺は力を押さえ込む……人の姿に戻りフランドールに近寄る。

服は焦げ付いてたが、フランドール自身には目立った外傷は無かった。

ただ、空中に浮んだまま呆然としてるのが心配だな。

「おい、大丈夫か？」

「……………」

「おゝい」

「ねえお兄ちゃん！ 今のもう一回やって!!」

「……はい？」

声を掛けても返事が無かったと思ったら、突然元気になり『ドラゴンブレス』をもう一度見せてくれと言い出した。

うん、なんでそうなるのか俺にも良く分からない。

竜に変身する事以外は、特別珍しい事でもないと思うんだけどな。

「ねえゝもう一回やってよゝ」

「あゝ……今日は疲れたから勘弁してくれ」

「ええゝ!」

「今度遊びに来た時に別の竜を見せるから、それで我慢してくれ」

「そんなの待つてられないよ」

「なら、フレンドールがウチに遊びに来ればいいだろ」

「……行っても良いの？」

そう聞かれると、俺も良く分からないんだが……まあ大丈夫だろ。弾幕ごっこをするにしても、神社と人里に迷惑が掛からない場所に移動すれば良いし。

霊夢には文句を言われそうだけど、気にしていても仕方が無いか。

「幾つか約束を守ってくれればな」

「うん！ それで約束って？」

「それはだな――」

「おゝい、リユウ！ 大丈夫かゝ！」

「――この声は魔理沙か？」

声が聞こえた方を振り向くと、魔理沙と何故かボロボロに為っているパチュリーがやって来た。

多分、小悪魔さんがフランドールの事を二人に知らせてくれたんだろ。

……しかし、随分とボロボロにされたなパチュリー。至近距離でマスパでも受けたのか？

「ねえお兄ちゃん。約束ってなに？」

「あゝ……それは後で話すよ。今はあの二人と合流しよう」

「はい！」

俺はフランドールの手を取って、二人を合流した。

他の竜を見せるなんて約束をしたけど……色んな意味で大丈夫かな？

第十六話 悪魔の妹（後書き）

オマケ

「そう言えば、フランドールに一つ聞きたい事があるんだけど」

「ん？ なぁに？」

「なんで行き成り襲って来たんだ？」

「お姉様が「面白い相手が来たから、思いっきり遊んで来なさい」って」

「あゝそれで襲って来たと」

「うん！」

「（つまり、原因はレミリアか。……あいつ、何時か泣かす）」

第十七話 火竜飛翔

フランドールと知り合ってから二週間が経った。

壊れ掛けた剣の代わりは未だに見付かってないが、コレと言った厄介事もなく平和な日々を過ごしている。

早いところ別の剣を手に入れたいんだけど、中々いい武器が無くて困っていた。

一応、里の鍛冶屋に見せたけど……はつきりと買い換える事を進められたよ。

俺もそうしたんだけど、いい武器が見当たらない上にお金もなくて森近さんの所に道具を売りに行っているから、収入が無い訳じゃないけど……貰える金額が今一つで。

あの変な人形のように珍しい物が手に入ればいいんだけど、そう簡単に手に入らないから珍しいんだよな。

そんな愚痴を霊夢に零しつつ、何時もの様に二人でお茶を飲んでいたある日、神社にフランドールと魔理沙が遊びに来た。

「やつほ、お兄ちゃん！　遊びに来たよ！！」

「いらつしゃい、フランドール。昼間なのによく来たな」

「今日は曇り空だから平気なんだよ」

「そうなのか。……それで魔理沙は何の用だ？」

「わたしも遊びに来ただけだぜ。フランと一緒になのはただの偶然だ」

「偶然か。なら、仕方が無いな」

「仕方が無いんだぜ」

「……あんた等、訳の分からない挨拶してんじゃないわよ」

「霊夢。そう言う細かい事を気にしたら負けだぞ？」

「細かい事のかしら……」

気にするほど細かいのかは知らないけど、魔理沙相手ならこんな挨拶でもいい気がする。

魔理沙はなんて言うか……フランクだからな。堅苦しい挨拶よりは良いだろ。

心の中でそんな事を考えていると、フランドールが自分の定位置と言わんばかりに俺の膝の上に座ってきた。

なんでなのか未だに分からないけど、あの戦いの後からフランドールには妙に懐かれてしまった。

別に困る様な事でもないけど、なんでこんなにも懐かれたのかが分からない。

「……ちよつと其処の吸血鬼。なんでリュウの膝の上に座ってるのよ」

「なんでって……フランクが座りたいから」

「はしたないから降りなさい」

「えゝやだゝ」

「やだって……アンタねえ」

「まあ、落ち着けよ霊夢。相手は子供だぜ？」

「あのね魔理沙。相手は吸血鬼よ？ 見た目は幼くても私達よりは年上に決まってるじゃない」

「実際のところは如何なんだフラン？」

「んゝつとねえ……確か495歳の筈だよ」

「……マジで？」

「うん」

なんで霊夢がこんなに突っかかって来るのか分からないが、フランドールって意外と長生きなんだな。

この子で495歳って事は、姉のレミリアはそれ以上の年齢って事か。

……でも、その程度の歳なら其処まで目くじらを立てる必要も無いと思うが。

「なあ、一つ聞きたいんだけど。495歳って年寄りなのか？」

「妖怪だから年寄りとは言わないけど、私達にんげんからすると十分過ぎるわね」

「そうか。なら、俺も霊夢からすると年寄りになるのか」

「はあ？ なんでそうなるのよ」

「だって、俺もフランドールと同じかそれ以上に生きてるからな」

「「「……えっ?」」」

確か、俺があの世界に召喚されたのが数百年前だった筈。

その時の召喚事故で、俺は二つに別れたけど……召喚される以前から生きてる事になるよな。

まあ、もう一人の自分が目覚めるまで長い事眠ってはいたけど、少なくとも数百歳なのは間違いない。

召喚される以前の事は何も覚えてないが、下手するとフランドールよりも年上になるな。

「……もしかしたら数千年も生きてたりしてな」

「あ、アンタ。一体幾つなのよ」

「さあ? あんまり古い事は覚えてないけど、数百年以上生きてるのは間違いないよ」

「……そう言えばアンタ竜だったわね。普段が普段だけに、すっかり忘れたわ」

「あゝっと、つまり如何言う事だ?」

「俺も見た目以上の爺だつて事」

「いや、意味が分からないって」

「説明すると長いぞ」

「なら遠慮しとくぜ」

「それよりもリュウ！ あの時の約束守ってよ！！」

約束って……今度は別の竜を見せるって奴の事かな？

別に今じゃなくてもいい気がするけど、このままフランドールを膝の上に座らせてたら、またさっきの話をぶり返すだけか。話を逸らすと言う意味でも、ここは約束通り変身するか。

「約束？ ……アンタ、今度は何をしたのよ」

「別に大した事じゃないよ。ちょっとフランドールに別の竜を見せるって約束しただけだ」

「……十分に大した事あるじゃないの」

「まあ、霊夢の言いたい事も分かるけど……今回は大目に見てよ」

「……仕方が無いわね」

「ありがとう、霊夢」

そう言っただけ俺はフランドールを退けてから立ち上がり、直ぐに変身しようとしたが、今俺達が居る裏庭では狭すぎる。

……体格の小さい『パンク』や『オーラ』ならまだしも、今回変身しようとしている竜には合わない。

あの竜は体格的に『オーラ』よりも大きいからな、此処じゃ周りの物を壊しかねないか。

……仕方が無い、此処は一度境内に移動してから変身するか。

………
………
………

俺が事情を話すと三人はあっさり了承してくれた。

フランドールや魔理沙は兎も角、霊夢も二つ返事で承したのはちよつと意外だったな。

只単に神社を壊されなくなっただけか、それとも他の竜に興味があつたのか？ ……意外と両方の理由だったりしてな。

境内に移動した俺は境内の真ん中に立ち、意識を集中し俺の中に眠っている力を呼び覚ます。

「でえあああああああッ！！」

力を解放すると、足元から赤い光が立ち上り俺を包み込む。

……… 本当は此処で竜人とも言える姿になるけど、今回は面倒なんでその過程を飛ばす。

俺を包んでいる光を吹き飛ばすと、俺はアズキ色の飛竜へと変身した。

多分、俺が変身出来る竜の中でイメージが良いのはコレかな。 …… 『ナイト』と『バンドスナッチ』はもはや別の存在って感じだしな。

《………コレが火竜『ジャバジブ』だ》

「………」

《如何した？ 何処か変か？》

「………スゲーなりユウ！ お前、本当に変身出来たんだな！！」

「前に見た黒いトカゲよりもカッコイイ!!」

「そう？ 私は前に見た『カイザー』の方が好きだけど」

《アレは危険だから当分は使う気は無い》

「……まあ、あの破壊力じゃあね」

《いや、アレは以前に暴走した前科があつてな》

「もう分かったから全部言わなくて良い」

確かに『カイザー』は一度暴走した事があるが、今の状態で一番危険なのは間違いなく『アンフェニ』だろうな。

あの力は、俺の中にある他の竜達よりも危険だからな。アレが俺本来の力だと思つと自分でもゾツとするぞ。……召喚事故で記憶を失う以前の俺は、一体何を思つて生きていたんだろうな。

「お兄ちゃん、一つお願いがあるんだけど良い？」

《面倒事であればな》

「フランね、リュウの背中に乗つて空を飛んでみたい!!」

《……はっ？》

「お、それ良いな。リュウ、わたしも乗せてくれ!」

《いや、お前ら普通に飛べるだろ》

「それとこれとは関係ないの！　ねえお兄ちゃん、良いでしょ？」

《……………》

さて、フランドールのこの頼みだが……如何したものか。

特に拒む理由はないが、あまり甘やかしても良いものなのだろうか？
頼られるのが嫌な訳ではないが、だからと言って何でも頼みを聞く
訳にもいかんだろ。

………まあ、今回くらいは構わないか。どうせ飛ぶだけだしな。

《やれやれ、仕方が無いな》

「えっ？！　それじゃあ！？」

《直ぐに飛ぶからさっさと乗れ》

「うん！」

「サンキューな」

《嗚呼。……それで霊夢は如何する》

「わ、私は良いわよ。自分で飛べるし」

《遠慮する必要は無いぞ。二人も三人も大して変わらないからな》

「別に遠慮なんてしてないわよ」

「まあまあ、折角リュウがこう言ってるんだし、変な意地はらない
で乗ろうぜ？」

「あ、ちよつと魔理沙?!」

多少渋っていた霊夢だが、結局は魔理沙に強引に乗せられた。結局は三人を乗せる事になったが、特に問題も無いだろう。

俺は背中に居る三人を振り落とさない様に注意しながら、両翼をはためかせ空へと飛翔した。

……

……

…

今日が曇りだと言っても、あまり高度を上げ過ぎるとフランドールが灰になる。

そこら辺の事を考慮しつつ、出来るだけ高い所を飛ぶようにした。背中に居るフランドールと魔理沙は、竜オレに乗って見える景色が珍しいのか、さつきからはしゃぎっ放しで少々五月蠅い。

だが、一緒に居る筈の霊夢の声は全く聞こえてこない。途中で降りた感じはしなかったから、まだ背中に乗っている筈なんだが……。なんとなく気に為った俺は、後ろを振り向き霊夢の様子を窺った。

《如何した霊夢。具合でも悪いのか?》

「……別にそんな事ないわよ」

《なら如何した。元気が無いように見えるが》

「あのね、幻想郷では龍は最高神なのよ。……異世界のとは言え、そんな存在の背中に乗ってはしゃげる訳無いじゃない」

「んな細かい事気にするなって霊夢。こう言う時は楽しんだもの勝ちだろ？」

「私は巫女よ？ 気にするなって方が無理よ」

《神、か……》

あの世界を旅してきた所為か、俺は？神？と言うのが嫌いだ。

……いや、？神？と言う存在が嫌いなんじゃなくて、そう呼ばれるの嫌いなんだ。

これだけの力を持っていた所為で、自分自身の命も狙われ、無関係な人達を巻き込んでしまった。

だからあの時、俺は力^{アイツ}を捨て、神である事を止めたんだ。

力そのものである俺には、捨てる事なんて出来ないけど……神である必要は無い筈だ。

《…なあ霊夢。お前は俺の事を神様として見ていたのか？》

「えっ？ ……別にそんな事は無いわね。寧ろ、時々忘れそうになるし」

《だったら、そのまま忘れてくれないか？》

「はあ？ アンタ、いきなり何を言ってるのよ」

《俺は力を持ち過ぎてしまっただけの竜だ。決して神なんかじゃない》

「そんな事言われてもねえ」

《人間が言う？神？の定義は良く分からないが、俺は只この幻想郷に……霊夢の傍に居たいだけだ》

「ッ?! ……なら、アンタを一人の男として見て、もし龍神に何か言われたら如何するのよ」

《その時はお前を守る。何が遭っても霊夢だけは絶対に守り切ってみせる》

「~~~~~ッ!? / / /」

この位置からだとは良く見えないが、何故か霊夢が顔を真っ赤にしている。

風邪でも引いたのかと思ったが、今日一日の様子を見てそれは無いと思う。

それなら一体何が原因なんだ？ 寒くて顔が赤く為ってる訳じゃないだろうし……。

「……なあ、霊夢」

「なによ」

「お前ン家、今夜は赤飯か？」

「馬鹿言ってるんじゃないわよ!! / / /」

「ねえ、折角だから咲夜に頼んでご馳走を作って貰おうよ」

「洋式でのお祝いか……。それも良いかもな」

「勝手に話を進めるんじゃないわよ!!」

二人の言い草が気に入らないのか、霊夢は俺の背中の上で暴れ始めた。

せめて降りてからにしてくれば良いが、どう言う訳か背中の上でなんだよ。

このまま暴れられるとちょっと……いや、マジでヤバイかもしれない。

《おい、霊夢！ 俺の上で暴れるな!! バランスが崩れる!!》

「元はと言えばアンタが悪いんじゃない!!」

《なんでそうなるんだ?!》

「ウツサイ、馬鹿!!!!」

俺は必至に霊夢を宥めようとするが、火に油の状態で効果は無かった。フランドールと魔理沙にも協力して貰おうと思ったが、あの二人何時の間にか降りてやがった。

去り際に「痴話喧嘩は犬も食わない」とか言ってたが、それよりも霊夢を止めるのを手伝えと言いたい。

その後、なんとか霊夢を落ち着かせた俺は、ボロボロに為りながら博麗神社に帰ることにした。

第十七話 火竜飛翔（後書き）

……キーワードに『ツンデレイム』を追加しようかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2724w/>

竜が辿り着いた幻想郷

2011年10月7日17時10分発行